

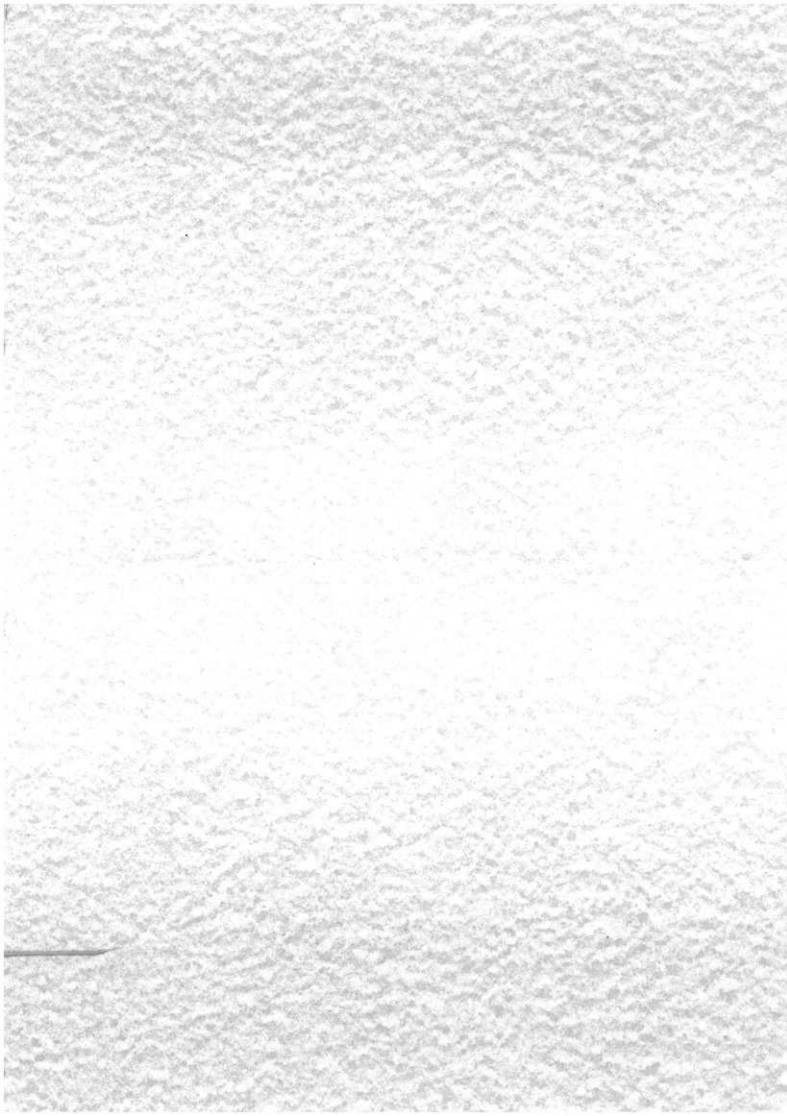
大阪市阿倍野区

難波大道跡発掘調査報告

(仮称) 阿倍野学園建設工事に伴う発掘調査報告書

2007.3

財団法人 大阪市文化財協会



大阪市阿倍野区

難波大道跡発掘調査報告

(仮称) 阿倍野学園建設工事に伴う発掘調査報告書

2007.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市阿倍野区

難波大道跡発掘調査報告

(仮称) 阿倍野学園建設工事に伴う発掘調査報告書

2007.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

今回、初めて「難波大道跡」の一隅で行った調査の報告書を上梓する。

難波大道は、「難波から京に至る大道を置く」とする推古21年の記事をもって、難波から南へと延びる直線の道路であるといわれている。

上町台地北端部の難波宮から京内の朱雀大路を経て、京外に延び、さらには大和へと通じるこの道路の建設は、人々の往来や様々な文物の流通路の確保のため、起伏のある地形を克服しつつ、国家的大工事として進められたものであろう。現在、その痕跡はごく一部でしか確認できていないが、これまでも周辺部でいくつかの調査を行ってきた。

今回の調査は難波大道が通ると推定される阿倍野区美章園で行ったが、ここではその存在の確証は得られなかった。しかし、中世以降、耕作地として利用されていたことが明らかとなり、この地の開発の歴史を知ることができた。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで、数々のご協力を賜った大阪市健康福祉局をはじめとする関係各位の皆様に心より感謝の意を表する次第である。

2007年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は、財団法人大阪市文化財協会が大阪市健康福祉局の委託を受け、2006年6月28日から2006年8月4日にかけて阿倍野区美章園3丁目28で実施した(仮称)阿倍野学園建設工事に伴う難波大道跡発掘調査(ND06-2次、NDは難波大道跡を示す略号)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市健康福祉局の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会 文化財研究部次長 南秀雄の指揮のもと、同長原調査事務所所長代理 絹川一徳が主として担当した。
- 一、本書の執筆および編集は、文化財研究部次長 南秀雄ならびに同長原調査事務所所長 松尾信裕の指揮のもと、絹川および文化財研究部学芸員 寺井誠が行った。
- 一、発掘調査および報告書作成にあたっては、藤田実(大阪市史編纂所)・後川忠太郎(財団法人大阪府文化財センター)の両氏から貴重なご教示を賜った。記して深く感謝の意を表する。
- 一、調査の基準点測量作業は株式会社パスコに委託した。
- 一、遺構写真は担当学芸員が撮影し、遺物の写真撮影については有限会社阿南写真工房に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には数多くの補助員諸氏の援助を得た。心から感謝したい。

凡 例

1. 本書で用いた層序学・地積学に係わる用語の一部は、[趙哲済1995]に準じる。
2. 遺構名の表記は、溝(SD)、井戸(SE)、土壕(SK)、柱穴・小穴(SP)、その他(SX)の分類記号の後に、古代以前、中世、近世の時代別に通し番号を付している。
3. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づいている。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+〇mと記した。
4. 本書で用いた地層の土色および土器の色調は標準土色帖[小山正忠・竹原秀雄1967]に拠った。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
----------------	---

第Ⅱ章 遺跡周辺の概要	3
-------------	---

第1節 調査地の立地と歴史的環境	3
------------------	---

第2節 難波大道跡の発掘調査の現状	7
-------------------	---

1) はじめに	7
---------	---

2) 大阪市域の調査の概要	7
---------------	---

3) 大和川今池遺跡の調査概要	10
-----------------	----

4) 小結	12
-------	----

第Ⅲ章 調査の結果	13
-----------	----

第1節 層序	13
--------	----

第2節 古代以前の遺構	15
-------------	----

1) 遺構の概要	15
----------	----

2) 遺構	17
-------	----

第3節 中世の遺構と遺物	18
--------------	----

1) 遺構の概要	18
----------	----

2) 遺構と遺物	18
----------	----

第4節 近世の遺構と遺物	24
--------------	----

1) 遺構の概要	24
----------	----

2) 遺構	24
-------	----

3) 遺物	28
-------	----

第Ⅳ章 難波大道をめぐる問題と検討	31
-------------------	----

第1節 難波大道の研究現状と課題	31
------------------	----

1) はじめに	31
---------	----

2) 研究現状	31
---------	----

3) 考古学的研究と与えられた課題	33
第2節 難波大道跡と周辺の地理的環境	35
第V章 まとめ	47
引用・参考文献	49
あとがき・索引	
英文目次	

図 版 目 次

1 調査区北半部の遺構	中：調査区南半部SD201・202断面(南から)
上：調査区北半部の遺構検出状況(東から)	下：調査区北半部SX210断面(東から)
下：調査区北半部の遺構完掘状況(東から)	6 近世の遺構(一)
2 調査区南半部の遺構	上：調査区北半部SX120(南西から)
上：調査区南半部の遺構検出状況(東から)	中：調査区北半部SX120(西から)
下：調査区南半部の遺構完掘状況(東から)	下：調査区北半部SK107(南西から)
3 古代以前の遺構	7 近世の遺構(二)・地層断面
上：調査区北半部SK301検出状況(西から)	上：調査区北半部SD101・102完掘状況
中：調査区北半部SK301断面(南から)	(北東から)
下：調査区北半部SK301完掘状況(南から)	中：調査区北半部SD103～105完掘状況
4 中世の遺構(一)	(北東から)
上：調査区北半部SD201検出状況(南西から)	下：調査区北半部東壁中央断面(西から)
中：調査区北半部SD201完掘状況(南西から)	8 地層断面
下：調査区南半部SD201・202検出状況	上：調査区北半部東壁断面(西から)
(南東から)	中：調査区南半部東壁断面北側(南西から)
5 中世の遺構(二)	下：調査区南半部東壁断面南側(南西から)
上：調査区南西部御湯窪完掘状況(西から)	9 近世の遺物

挿 図 目 次

図1 難波大道跡の位置	22
図2 調査位置図	25
図3 難波大道跡とその周辺の遺跡	26
図4 ND93-32次出土の蓮華文軒丸瓦	27
図5 阿倍野区および東住吉区における難波大道跡	28
発掘調査地位位置図	32
図6 大和川今池遺跡調査地位位置図	35
図7 大和川今池遺跡で見つかった難波大道跡	36
図8 東映地層断面図	37
図9 古代以前の遺構平面図	38
図10 古代以前の遺構の平面図・断面図	39
図11 中世の遺構平面図	40
図12 SD201～209、SX210断面図	41
図13 中世の遺構の平面図・断面図(1)	42
図14 中世の遺構の平面図・断面図(2)	43
図15 近世の遺構平面図	44
図16 近世の遺構の平面図・断面図	45
図17 SX120断面図	46
図18 出土遺物	47
図19 大阪平野の古代道路網	48
図20 四天王寺東側の方格地割と南北道路	49
図21 調査地と難波大道跡周辺の地形図	50
図22 調査地と難波大道跡周辺の航空写真	51
図23 調査地と難波大道跡周辺の土地条件	52
図24 調査地と難波大道跡周辺の等高線図	53
図25 難波大道跡の断面図	54
図26 難波大道跡の旧字名	55

表 目 次

表1 難波大道跡で行われた既往の調査(1)	45
表2 難波大道跡で行われた既往の調査(2)	46
表3 難波大道跡で行われた既往の調査(3)	47
表4 難波大道跡で行われた既往の調査(4)	48

写 真 目 次

写真1 発掘調査風景	2
------------	---

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

難波大道(註1)は難波宮を基点とした古代の幹線交通路である。『日本書紀』推古21(613)年の条にある「難波から京に至る大道を置く」という記述の存在から、早くから注目され、これまでに幾人もの研究者によってこの道路に関する考証が行われてきた。なかでも難波大道の位置を具体的に復元した岸俊男氏と足利健亮氏の研究[岸1970・足利1970]は重要で、その後の古代官道の研究にも大きな影響を与えた。岸氏は、明治19(1886)年測量の「大阪実測図」を基に、四天王寺東側に残っていた方格地割について、この地割が難波宮中軸線を南へ延長した線上に位置することや「大道」の字名があることから、この南北線が「難波道路」の跡で、方格地割も条坊の跡を示していると指摘した。足利氏も同様で、難波宮中軸線上を南北に通る難波大道が和泉・河内国境の交点まで南下する可能性を指摘した。

1980年、阿氏の学説を裏付ける考古学的発見があった。大和川今池遺跡で行われた発掘調査で、幅18m、延長170mの側溝を伴う直線状の道路遺構が検出された。この遺構は難波宮中軸線に合致し、側溝からは前期難波宮の時期に当る土器が出土した。こうした経緯を踏まえて、難波宮を起点とし大津道(長尾街道)との交点を終点とした南北道路を難波大道とするが、天武天皇8(679)年に都の外郭である羅城の築造に関する記述があり、難波京の存在も推定されていることから、南北道路のうち難波宮から羅城南端までは朱雀大路、それ以南は難波大道に分けている。いずれも埋蔵文化財包蔵地であり、難波京朱雀大路跡、難波大道跡という名称で登録されている。

今回、難波大道跡に当る当地において、大阪市健康福祉局による障害者施設である(仮称)阿倍野学園の建設が行われることとなった。調査面積は660㎡で、東側の一部が難波大道の推定ラインに当る。

大阪市教育委員会文化財保護課は2005年12月2日に敷地内の4箇所を試掘調査を実施した。その結果、4箇所ともに地表下30cm前後で黄白色の地山層が確認され、そのうち1箇所で古代の土師器細片や炭が含まれる埋土をもつ遺構が検出された。そこで、教育委員会は工事により遺構面が破壊されることになる基礎部分の660㎡を対象に記録保存のための本調査が必要であると判断した。これに基づき大阪市健康福祉局と財団法人大阪市文化財協会は「(仮称)阿倍野学園建設工事に伴う難波大道跡発掘調査業務委託」の契約を締結した。

発掘調査は2006年6月28日に着手した。調査区はほぼ方形に近い形状で設定したが、住宅密集地であり、発

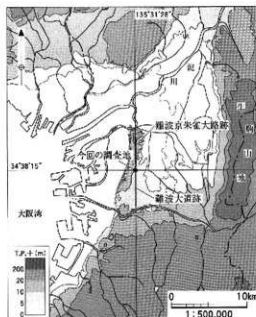


図1 難波大道跡の位置



図2 調査位置図



写真1 発掘調査風景

掘排土を場外に持ち出すことが困難なため、場内に排土置場を確保する必要があった。そのため、作業工程上、調査区を南北に2分割して発掘調査を進めることとした。

6月28日に調査地に発掘機材を搬入し、調査区の設定を行ったのち、北半部から重機による表土掘削作業を開始した。全体的に攪乱が著しく、中世以前の遺物包含層も大半が削平を受けていたため、人力を併用しながら地山層上面まで掘削を行い、近代以降の攪乱の除去に努めた。

6月30日に北半部の地山上面までの掘削作業が完了し、ただちに平面的な精査と遺構検出作業を行った。7月7日までに北半部の遺構検出作業が完了し、その後、遺構掘削と並行して写真撮影・実測図化作業を行った。

7月24日からは南半部の重機掘削に着手した。南半部も攪乱が著しかったため、北半部と同様に地山層上面において遺構検出作業を実施することとした。7月28日までに南半部の遺構検出作業が完了し、その後、遺構掘削・写真撮影・実測図化作業を行った。8月3日に記録等の必要な作業は終了し、ただちに埋戻しを開始、翌4日にすべての現場作業を完了した。

(細川)

註)

(1)「難波大道」は、『日本書紀』などの古文獻に登場する固有名詞ではなく、1980年の発見の際に作られた用語である。本書ではこのことを最初に断ったうえで、特に限定しないかぎり総括弧なして用いることとする。

第Ⅱ章 遺跡周辺の概要

第1節 調査地の立地と歴史的環境

難波大道跡は1980年の発見後に埋蔵文化財包蔵地に指定された遺跡で、難波京朱雀大路跡の延長線上に延び、J R 大和路線を境にした南側から始まり、大和川を越えて、長尾街道(大津道)と交わるまでの約7.5km、幅100mの範囲を指す(図3)。調査地点はこの難波大道跡のもっとも北側に位置することから、本節では調査地近隣に限って述べることとする。

調査地は上町台地の東側斜面に立地するが、調査地一帯の地形を『明治前期・昭和前期大阪市地図』[清水靖夫編1995]でより細かく確認すると、小さな2筋の谷に挟まれた微高地に立地する。調査地の約1km南の桃ヶ池は、この東側の谷の名残と思われ、この2筋の谷は阿倍野区三明町1丁目辺りで合流し、さらに北北東方向に延び、生野区の御勝山古墳の西側に至る。

近隣でヒトの活動が確認できるのは、後期旧石器時代以降である。調査地の約1km東に位置する桑津遺跡のKW96-13次調査地では、地山の風化層からサヌカイト製のナイフ形石器が2点出土しており、これらは原位置であった可能性が高い[大阪市文化財協会1999a, pp.73-80]。また、約1km西の阿倍野筋南遺跡AS98-2次調査地(註1)でも、古墳時代前期の包含層に含まれてサヌカイト製のナイフ形石器が1点出土している[大阪市文化財協会1999b]。なお、ヒトの痕跡ではないが、阿倍野筋での地下鉄工事の際に、中期更新世に該当するMa10直下でナウマンゾウの右有鈎骨、左右腓骨、左上顎側切歯が発見されている[樽野博幸1979]。

縄文時代になると上記の谷の北延長上に位置する勝山遺跡で、縄文時代早期末から前期初頭に位置づけられる粟津S Z式土器がまとまって出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991, pp.77-93]。谷の窪み内の流路からの出土であるが、近隣に集落があった可能性が高い。この時期、こういった集落は旧河内潟沿岸に散在していたことが知られている。これ以外では縄文時代の遺跡の発見はないが、桃ヶ池遺跡MG98-6次調査で、横大路火山灰を含む偽礫が後世の流路から出土していることから、縄文時代の地層が谷内に残っていた可能性が高い。

弥生時代になると桑津遺跡で集落が展開するようになる[大阪市文化財協会1998, pp.255-264]。集落自体は弥生時代前期からあったようで、桑津遺跡の東端の杭倉2丁目における調査(註2)では畿内第I様式中段階の土器がまとまって出土している[田中清美1995、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996]。弥生時代中期になると、環濠と推測される大溝や井戸、方形周溝墓が現れることから、上町台地東斜面の拠点集落であったと考えられる。弥生時代後期では集落西側で竪穴住居などの遺構が見つまっているものの、集落自体は縮小に向かうようである。

一方、阿倍野筋南遺跡では古墳時代前期に集落が展開するようになる[大阪市文化財協会1999b]。

AS89-1・97-8・98-2・06-1次調査では竪穴住居が検出され、AS98-7次調査では桁行4間(7.2m)以上、梁行2間(5.5m)の総柱の掘立柱建物が検出されている。また、当遺跡では管状土鍾が多量に出土していることや、当時の海岸線からの距離が1km未満と推定されることから、海への依存度の高い集落であったと考えられる[寺井誠1999]。

古墳時代中期になると、再び桑津遺跡で集落が展開するようになる。これまで須恵器型式でいうTK208型式の段階を前後する時期の竪穴住居跡や溝、土壇などの遺構が発見されている[大阪市文化財協会1998]。また、近年、阿倍野筋南遺跡でもTK208型式がそれよりも古い時期の須恵器や土師器が土壇からまとまって出土しており、古墳時代中期にも集落があったことが明らかになっている[大阪市文化財協会2006b]。なお、桑津遺跡では古墳時代後期前半の遺構・遺物が希薄で、後半以降に再び見られるようになり、飛鳥時代につながる。また、山坂遺跡では第2節でもふれるように、古墳時代後期の掘立柱建物が検出されている。

一方、調査地近隣では古墳そのものは発見されていないが、後代の地層から埴輪がよく出土することで知られており、明治6(1873)年の『桑津村絵図』には東住吉区北田辺から西にかけて大塚・赤塚・鎌子塚・墓の前といった地名が残っている[上田宏範1988]。また、桑津遺跡北部に位置するKW94-4次調査地では、飛鳥時代の遺構から円筒埴輪や家形埴輪が出土しており、こういった状況は一帯にあった古墳群が飛鳥時代に破壊されたことを反映しているものと思われる[大阪市文化財協会1998、pp.231-248]。

ところで、上町台地上では飛鳥時代になると、各地で新たな展開がみられるようになる。近隣では桑津遺跡KW91-8次調査地で方位をそろえる掘立柱建物群が検出され、井戸から呪符木簡が出土している[大阪市文化財協会1998、pp.145-163]。遺物は難波Ⅲ中段階[佐藤隆2000]で、前期難波宮が造営される前後の時期に当る。前述したように、この地域では同じ頃に古墳が破壊されていることが明らかになっており、7世紀中頃にこの地域で大きな開発が始まったことを示唆するものである。なお、桑津遺跡では7世紀中頃以降も掘立柱建物が発見されている。これらは遺跡の西半分に集まる傾向にあり、難波大道の造営に伴う変化かもしれない。

近隣の寺院跡としては、本調査地から約600m西に位置する阿倍寺跡や、約800m南東には難波大道跡から約300mの地点に位置する田辺廂寺がある。阿倍寺跡は塔の心礎が残っており、かつては基壇と思われる高まりも残っていたということであるが、近年の開発でその面影もなくなっている。1999年に発掘調査が実施され、中世の豪から重圓縁複弁蓮華文八葉軒丸瓦など創建時のものと思われる瓦が出土している[大阪市文化財協会2001、pp.51-60]。田辺廂寺は伽藍配置もよくわかっていないが、大正14(1925)年に近鉄北田辺駅の約150m北で土取り工事の際に複弁七葉蓮華文軒丸瓦や重圓文軒丸瓦が出土している[山本加三1926]。また、田辺廂寺の指定範囲の中心に位置するKW87-20次調査地で奈良時代の大溝が2条検出されている[大阪市文化財協会1998、pp.62-68]。これらの溝は本来の寺域の東限と考えられており、そうだとすれば田辺廂寺はより西側の難波大道寄り位置していたことになる。なお、複弁蓮華文軒丸瓦については、桑津遺跡KW91-18次調査地でも出土している[大阪市文化財協会1998、pp.168-185]。

平安時代になると、桑津遺跡では一時集落が途切れるようであるが、平安時代末頃に南側を中心に集落が展開するようになる[大阪市文化財協会1998、pp.168-185]。また、阿倍寺跡でも16世紀前半に埋まる濠跡から平安時代後期から鎌倉・室町時代の瓦が多量に出土している[大阪市文化財協会2001、pp.51-60]。中世に入ると奈良街道や熊野街道が整備され、こういった交通の発達で古代寺院を核にした中世集落の展開を促したと思われる。一方、第2節でもふれるように、桃ヶ池遺跡で平安時代の瓦が出土しており、調査地の約500m南には治承2(1178)年創建と伝えられる法楽寺があることから、この時期に一帯で新たな寺院が登場したと思われる。

この時期以降の歴史的展開については発掘調査では明らかになっていないが、阿倍野一帯は交通の要衝である故に、南北朝から戦国時代にかけてしばしば戦場となり、荒廃してしまったようである。江戸時代になると交通の中心は熊野街道の西側を通る紀州街道に移り、市街地の拡張は四天王寺付近で止まることから、調査地一帯は長らく市街地化せず、農村のままで近現代を迎えるのである。

註)

(1) AS98-2次調査を行った時点では「阿倍野筋遺跡」と呼ばれていたが、2001年4月刊行の『大阪市文化財地図』において、阿倍野筋遺跡の範囲が拡大され、北側を「阿倍野筋北遺跡」、南側を「阿倍野筋南遺跡」と呼ぶようになった。本節に登場するASを冠する調査はいずれも「阿倍野筋南遺跡」に該当する。

(2) 現在では杭全2丁目一帯は「杭全遺跡」と呼ばれている。

第2節 難波大道跡の発掘調査の現状

1) はじめに

大阪市内においては難波大道跡は難波京朱雀大路跡の延長線上で、J R大和路線を境に南側から、大和川で区切られる松原市との境界線上までの幅100m、長さ約6.6kmの範囲を指すが、大阪府教育委員会の指定では現在の大和川を越えて、堺市南花田遺跡の北側で長尾街道(天津道)と交わるところまでが指定されており、ここを境に摂津国から和泉国に変わる。

難波大道跡は大和川・今池遺跡調査会や大阪府教育委員会が行った松原市域での調査が有名であるが、大阪市域でも数件の調査を行っている。以下でこれまでの調査の概要を記す。

2) 大阪市域の調査の概要

i) ND93-32次・MG98-6 調査(図5-A・B)

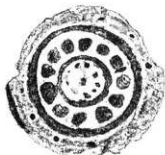
桃ヶ池の北西に位置する隣接した調査で、難波大道跡の推定中軸線(註1)から西に約150mの地点に位置する(A)。ND93-32次調査地については、この時点では埋蔵文化財包蔵地として指定されていなかったが、試掘調査の結果、中世の遺物包含層が良好に残っていることが明らかになり、1994年3月に本調査を行った[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1995、pp.143-149]。その結果、厚さ5~10cmの遺物包含層が確認され、瓦器や白磁・青磁といった12~13世紀の遺物に加え、無子葉弁十二葉蓮華文軒九瓦(図4)などの瓦が出土した。また、この包含層の基底面では南西-北東方向で幅1.4m、深さ0.2mの溝が検出されたが、土師器の細片しか出土しなかったために、時期は不明である。

ND93-32次調査地の南側に位置するMG98-6次調査(桃ヶ池遺跡)は、1999年1月から2月にかけて行った(B)[大阪市文化財協会2001、pp.39-42]。調査の結果、12世紀末~13世紀の瓦器を含む作土層が検出され、その作土層の下位の層準で南西-北東方向の溝が検出された。また、作土層を切り込む溝SD301からは横大路火山灰を含む偽蹟が見つかった。

なお、両調査地が面している桃ヶ池は開析谷の谷頭付近に当たり、北北東方向の延長上の約3kmの地点には縄文時代前期の土器が出土した勝山遺跡がある。この谷はこれらの調査地付近から約1kmは北方向に延びることから、難波大道の設定にどう影響したか検討する必要がある。

ii) MG99-5次調査(図5-C)

桃ヶ池の東側に位置し、試掘調査で弥生土器を含む包含層が検出され、1999年12月から翌年1月にかけて本調査を行った[大阪市文化財協会2002、pp.27-30]。調査地は1~5区のトレンチが設定され、2区には難波大道の推定中軸線が通り、3区は



0 10 20cm
1:4

図4 ND93-32次出土の蓮華文軒九瓦



図5 阿倍野区および東住吉区における難波大道跡発掘調査地位位置図

推定中軸線から2～10mの範囲に収まる。ただし、調査では弥生時代の溝を検出したものの、道路に
関係する遺構は見つからなかった。

iii) ND06-1次調査(図5-D)

難波大道跡の推定中軸線から50mほど西に位置する。試掘調査で近世以前と思われる地層が確認さ
れたため、2006年6月から7月にかけて本調査を実施した[大阪市文化財協会2006a]。調査の結果、
難波大道に関する遺構・遺物は見つからなかったが、中世の耕作溝が南北方向に延び、自然地形の傾
斜の方向とは異なることが明らかになった。これが難波大道が機能していた時期の土地利用を踏襲し
ていた可能性も残されるが、その一方で条里制の影響ということも考えなければならない。

iv) ND94-13次調査(図5-E)

東住吉区山坂1丁目で行った調査で、難波大道跡の推定中軸線から西に約50mの地点に位置し、試
掘調査で須恵器・瓦器片を含む包含層が確認されたため、本調査を実施した[大阪市教育委員会・大
阪市文化財協会1996, pp.107-112]。調査の結果、厚さ10～20cmの褐色シルト層が確認され、14世
紀を下限とする瓦器や、土師器・須恵器・凝灰岩片が含まれていた。また、この遺物包含層の基底面
では、南北方向の溝が検出され、龍泉窯系青磁や瓦器、端面を残す凝灰岩片が出土した。

なお、当調査地の東隣には治承2(1178)年に平重盛によって開基されと言われる法楽寺があり、
出土した中世の遺物はこの寺に関係するものと推定される。また、法楽寺は難波大道上にあり、この
寺の創建が難波大道の廃絶時期を知る手がかりとなる一方で、現在の寺域が創建当時と同じかどうか
という問題も残る。

v) MQ99-2次調査(図5-F)

難波大道跡から約150m離れた地点に位置し、試掘調査で中世と思われる包含層が検出されたため、
1999年9月から10月にかけて本調査を実施した[大阪市文化財協会2002, pp.21-26]。調査の結果、
近世の作土層が検出されたのみで、古代の遺構は見つからなかった。

vi) ND90-10・94-15次調査(図5-G・H)

山坂神社の北側で行った2件の調査で、前者(G)は1990年11月に[大阪市教育委員会・大阪市文化
財協会1991, pp.177-182]、後者(H)は1994年8月に行った[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会
1996, pp.113-116]。いずれも試掘調査で遺物包含層が確認されたため、本調査を実施するに至っ
た。調査の結果、6世紀代の掘立柱建物や柱穴・溝が検出され、古墳時代後期の集落が存在すること
が明らかになり、これらの調査の成果によって「山坂遺跡」が埋蔵文化財包蔵地として指定された[積
山洋1996]。しかし、難波大道に関係するような7～8世紀の遺構や遺物は検出されなかった。

なお、『日本三代実録』(901年完成)の清和天皇貞観4(862)年11月11日条に「詔以河内国従五位下
栗栖神、預之宮社。摂津国正六位上田辺東神、田辺西神並授従五位下」とあり、『摂津志』ではここで
の「田辺西神」が山坂神社に当るとしている。このことから山坂神社が9世紀中頃には成立していたと
いうことはわかるが、創建年代がいつごろまでさかのぼるのかは不明である。また、現在の神社の敷
地は難波大道跡にかかっているが、創建当時からこの範囲であったのか、もしくはある時期に難波大
道に上まで拡張したのかは不明である。

vii) ND01-6次調査(図5-1)

東住吉区南田辺5丁目で行った、難波大道の推定中軸線に近いところに位置する調査地である。試掘調査で中世の南北方向の溝が検出され、2001年6月に本調査を実施した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、pp.103-105]。調査の結果、この溝は幅が約2m、深さが0.4mあり、出土遺物から15世紀前半には埋没していたことが明らかになった。難波大道と直接的に関連する遺構は見つからなかったが、現在の土地区画とは異なる正方位を指向する地割が中世に存在したことが明らかになった。なお、この溝は推定中軸線から10.5m東に位置し、大道の側溝としても問題ないような場所に延びる。こういったことから大道の側溝が中世に再利用された可能性も残されるが、大道自体が機能していたかどうかはわからない。

3) 大和川今池遺跡の調査概要

大和川今池遺跡では大和川・今池遺跡調査会による調査と、1994-95年度に大阪府教育委員会によって行われた調査で難波大道跡が見つかった。

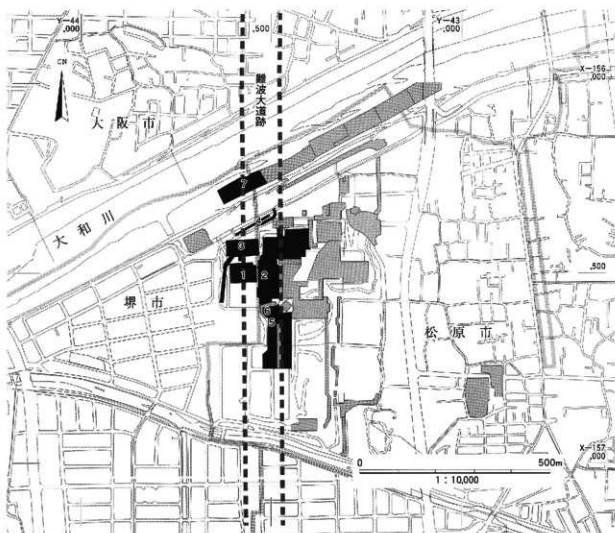


図6 大和川今池遺跡調査地位置図([大阪府文化財センター2003]の図4を基に作成)

堺市と松原市の境界付近に位置する大和川今池遺跡では1979年12月から翌年3月までの調査で、初めて難波大道の側溝を検出した[大和川・今池遺跡調査会1981]。この調査ではまず、第1地区(図6-1)で西側の、第6地区(図6-2)で東側の側溝が検出され、第7地区(図6-3)では40mにわたって路面の幅が約18mの道路が検出された。また、路面上には非常に薄いものの整地層が確認された。この結果、170mにわたって道路が延びていることが明らかになった。また、道路の中心点は前期難波宮中軸の延長線から東へ7.4mずれる程度で収まることから、高い精度で設定された道路であるということがわかる[積山洋1997]。なお、道路側溝は最大幅1.5m、深さ0.2mあり、7世紀末から8世紀初頭に位置づけられると思われる須恵器杯Aなどの遺物が出土している。

1994年6月から翌年3月にかけては、現大和川に平行して流れる今井戸川に沿って調査が行われ(図6-4)、94-2および94-3区で難波大道の側溝が検出された[大阪府教育委員会1995]。側溝は最大幅が1.5m、もっとも深いところで0.4mあり、これから導き出された路面の幅は18.5mであった。また、側溝は6世紀中葉の遺物包含層を切込んで掘られ、埋没後は中世以降の作土に覆われており、7世紀中頃に位置づけられると思われる須恵器杯Gなどの遺物が出土した。この調査によって、大和川今池遺跡内で少なくとも210m以上南北に道路が延びることが明らかになった(図7)。

また、大阪府教育委員会による1987年度の2件の調査(図6-5・6)では弧状に延びる幅6mあまりの道路状の遺構が検出されていて、側溝内からは黒色土器など9～10世紀の遺物が出土している[大阪府教育委員会1988a・b]。この調査地は推定中軸線から約50mの地点に位置し、報告では難波大道の方向に延びていることから、大道につながるも

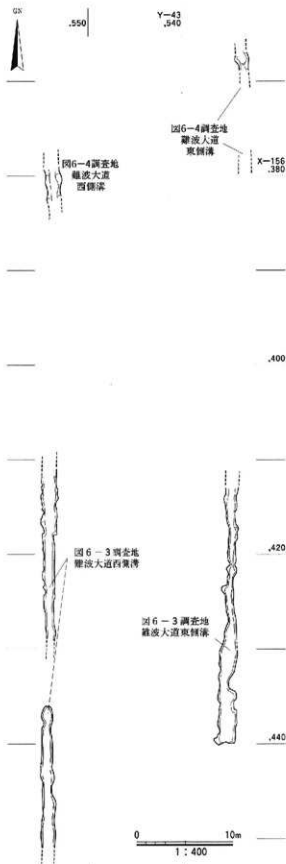


図7 大和川今池遺跡で見つかった難波大道跡
([大阪府教育委員会1995]の第15図をトレース)

のと考えられている。

なお、大阪府文化財調査研究センターが1996年9月から翌年3月にかけて行った調査地(図6-7)では、西側溝の延長上で中世の土器が出土した浅い溝(註2)が検出されたものの、明確な道路関係の遺構は検出されなかった[大阪府文化財調査研究センター2000]。この理由として同報告では、側溝が伴わず、道路のみが本来存在したのか、もしくは削平されたという2通りの説を挙げているが、前者については想定範囲を超えないということ、後者については過去の調査成果から道路側溝の検出面を考えた場合、十分検出されうる標高であるという問題点も挙げている[後川恵太郎2000](註2)。

大和川今池遺跡では今日まで約30箇所が調査されているが、難波大道が機能していたと考えられる飛鳥～奈良時代の遺構が前後の時期に比べて少ないことが指摘されており、大和川今池遺跡が当時の「道の通過点」であったという評価もある[大阪府教育委員会1995]。

4) 小結

以上のように発掘調査で難波大道が見つかったのは大和川今池遺跡の2件の調査のみで、大阪市内では見つかっていない。ただ、これら調査を見るかぎり、中世には耕地化されているようであり、加えて難波大道の推定中軸線上にある法楽寺の創建が治承2(1178)年であるということが正確であるなら、平安時代末には道路としての機能を失っていたということになる。この点についても法楽寺自体の寺域が平安時代末に現在の位置にあったかどうかは不明であり、大道の機能した時期を検討するにはいくつもの課題が残る。

(寺井)

註)

(1) ここでいう難波大道の「推定中軸線」とは前期難波宮宮城南門(「朱雀門」)の中心点($X=-146,662.7$ 、 $Y=-43,687.8$)と1979～80年に行なわれた大和川今池遺跡の調査で得られた道路の中心点($X=-156,022.5$ 、 $Y=-43,804.9$)を結んだ線を指す。

(2) この溝は第5面(同報告の図22)の平面図でいう17土壌の約150m東に図示されているが、遺構名は付けられていない。調査担当の後川恵太郎氏によると、この溝は深さ数cm程度で、底の凹凸が著しく、中世の遺物が出土したという。また、第5面は難波大道の側溝の検出が想定された面であるものの、この溝に平行して延びる浅い溝が他にも存在することからみても、耕作溝であり、難波大道の側溝と認定するのは困難であるという結論に至ったということである。貴重なご教示をくださった後川氏に感謝申し上げる。

第三章 調査の結果

第1節 層序

調査地は上町台地の東斜面部に当るが、周辺は街区が整理され宅地化も進んでいることもあって平坦地となっている。現地表面の標高はTP+7m前後である。地表から約0.30～0.45mで地山面となる。地山層より上位は中世以降の地層が堆積しているが、後世の攪乱や地層の削平のため、概して遺存状況はよくない。調査地における地層観察と記録はおもに調査区の東壁で行った(図8)。以下、各層の特徴を記載しておく。

第0層 現代盛土層および攪乱で、層厚は15～40cmである。調査区の全体を覆っていた。以前にあった建物を解体した際の盛土であり、その際に当時の旧地表面の大半は削平されたものとみられ、盛土層の直下は近世の作土層となっている。

第1層 オリーブ褐(2.5Y4/3)～灰オリーブ色(5Y4/2)細礫混り細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は5～10cmである。西側でやや厚く堆積する。近世の地層であり、近世陶磁器・瓦等が出土した。近世の遺構の大半は本層が埋土となっている。

第2a層 暗灰黄(2.5Y5/2)～灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂混り粘土質シルトからなる作土層で、層厚は5cm程度である。上層との層界は明瞭である。調査区の南東部を中心に認められた。本層からは瓦器・瓦・土師器・須恵器等がわずかに出土した。陶磁器等は認められないものの、近世にかけて形成された地層の可能性がある。

第2b層 黄灰(2.5Y5/1)～オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂混り粘土質シルトからなる作土層で、層厚は5cm程度ある。上層との層界はやや明瞭である。ほぼ調査区の全体を覆っていた。本層からは瓦器・土師質羽釜・瓦・土師器・須恵器等の細片が出土した。中世の地層であり、中世の遺構の多くは本層が埋土となっている。

第3層 褐色(10YR4/4)シルト質粘土からなる作土層で、層厚は5cm程度ある。上層との層界は明瞭で、非常によく締まった均質な地層である。調査区の南東部のわずかな範囲で認められた。遺物は認められなかったが、一部で中世の遺構の直上に本層が堆積する状況が認められた。よって、本層も中世の地層と判断できる。

第4a層 ぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂質シルト層で、上町台地の段丘構成層の風化殻である。いわゆる地山層である。上層との層界はきわめて明瞭である。全体に風化しており、上面には乾痕が形成されている。層厚は5cm程度である。

第4b層 黄灰(2.5Y5/1)～灰白色(2.5Y7/1)シルト質粘土～極細粒砂質シルト層で、地山層である。南東に向いシルト質粘土から極細粒砂質シルトへ漸変する。層厚は50cm以上ある。

第2節 古代以前の遺構

1) 遺構の概要

調査区の中央でSK301、それ以外の遺構を北西部で検出した(図9)。いずれも表土層(第0層)と中・近世の遺物包含層(第2～3層)を重機と人力で掘削した後、地山層上面で他の時代の遺構とともに検出されたものである。埋土が他の遺構群とは明瞭に区分され、暗褐～褐色の色調が強いという特徴が

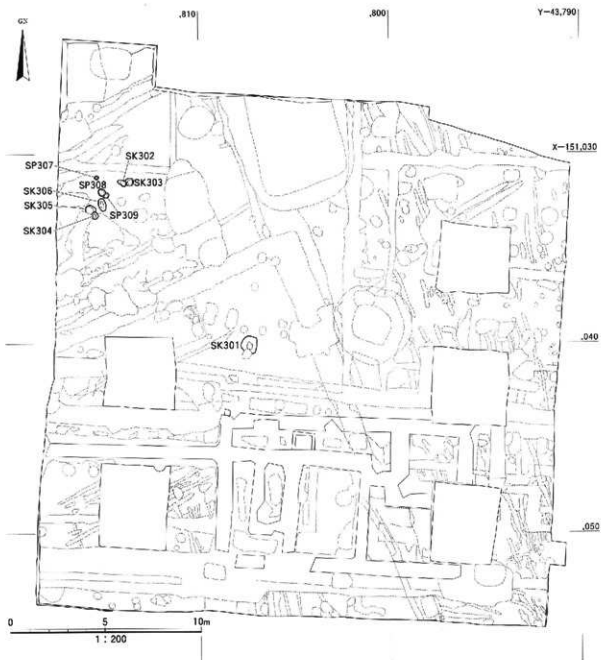
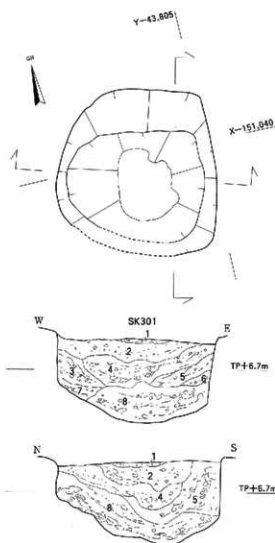
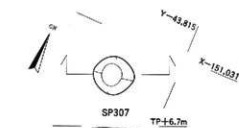


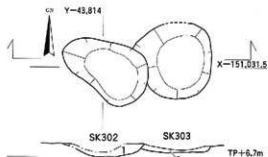
図9 古代以前の遺構平面図



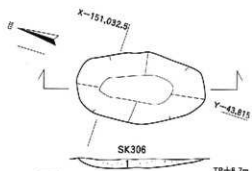
- 1: にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒砂混り粘土質シルト
 2: 褐色(10YR4/2)粘土質シルト
 3: 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土(地山の偽層をわずかに含む)
 4: にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土
 5: にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土(地山の偽層をわずかに含む)
 6: にぶい黄褐色または褐色(10YR4/3.5)シルト質粘土(地山の偽層をわずかに含む)
 7: にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混り粘土
 8: 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混りシルト質粘土(地山の偽層をわずかに含む)



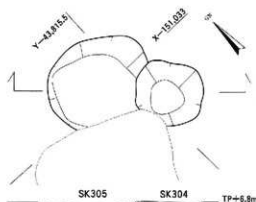
- 1: オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混り粘土質シルト



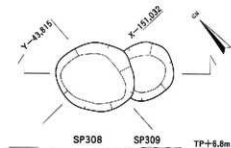
- 1: オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混り粘土質シルト
 2: オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混り粘土質シルト



- 1: 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混り粘土質シルト



- 1: 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混りシルト質粘土
 2: 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混り粘土



- 1: 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂混り粘土質シルト
 2: オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂混り粘土質シルト

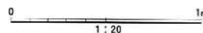


図10 古代以前の遺構の平面図・断面図

ある。上町台地上やその周辺の遺跡において発見される古墳時代から古代にかけての遺構埋土とも類似している。ただし、本調査区では古代以前の地層が後世の削平によって失われており、いずれの遺構からも遺物が認められなかったため、正確な時期は不明である。本報告では周辺の調査成果から、埋土が類似するこれらの遺構を古代以前として扱っておく。

2) 遺構

SK301(図9・10) 調査区のほぼ中央で検出した方形の土壌で、南北・東西長ともに0.85m、深さ0.45mである。古代以前とみられる遺構の中で遺存状態が良好なものである。このような形状や深さの遺構は掘立柱建物の柱穴の可能性があるが、柱痕跡や調査区内において組み合う可能性がある土壌または小穴はなかった。埋土は8層に区分され、いずれも黄褐色の色調が強い粘土質シルト～シルト質粘土である。埋土には地山層の小偽礫も含まれることから人為的に埋戻されたものとみられる。

SK302～305(図9・10) 調査区の北西部で検出した直径0.40～0.60m、深さ0.03～0.05mの円形から楕円形の土壌である。埋土は細粒砂を含むオリーブ褐～暗灰黄色粘土質シルトあるいはシルト質粘土である。

SK306(図9・10) 調査区の北西部で検出した長円形の土壌で、南北0.65m、東西0.38m、深さ0.05mである。埋土は細粒砂を含む暗灰黄色粘土質シルトである。

SP307～309(図9・10) 調査区の北西部で検出した、いずれも円形の柱穴または小穴で、直径0.20～0.40m、深さ0.02～0.04mである。埋土は黄褐～オリーブ褐色細粒砂混り粘土質シルトである。

第3節 中世の遺構と遺物

1) 遺構の概要

検出した遺構は小穴・土壇・溝・鋤溝等で、調査区の全域で認められた。いずれも地山層上面で認められた。調査区の中央に北西-南東方向の溝SD202と南西方向へ直角に曲るSD201があり、鋤溝群は南西-北東方向と南東-北西方向に分かれる。小穴・土壇も多数検出されたが、建物として組み合わせうものはなかった。SD201・202は何らかの境界に沿った区画溝の可能性があり、鋤溝の方向もこの溝を境に異なることから、これらの遺構群が地割を反映している可能性がある。遺構埋土は大半が第2b層であるが、東南隅部で第3層を埋土とするものもあった。

2) 遺構と遺物

SD201(図11・12) 調査区南側から北西方向に延び、調査区北半で南西方向に直角に曲る溝である。南東-北西方向は幅1.50m、深さ0.15~0.20m、南西-北東方向は幅0.80~1.20mで、深さ0.15mである。埋土は大きく2層に分かれ、一部でさらに細分化される。上層はおもにぶい黄褐色細粒砂混り粘土質シルトで下層はより粘土質が強い。上層には地山層に由来する小礫礫が含まれることから、埋戻したものと思われる。瓦質土器・土師器・瓦片などが少量出土した。

SD202(図11・12) 調査区のはほぼ中央を南東-北西方向に延びる溝である。SD201と一部が重複している。SD201よりも広く、幅2.00~2.50m、深さ0.10mである。おもな埋土は暗灰黄色細粒砂混り粘土質シルトである。土師器・瓦片が少量出土した。

SD201・202は他の溝と異なり、幅が広く、これを境として鋤溝群等は方向を違えていることから地割に関係した溝である可能性が高い。またSD201は南西へ直角に屈曲していることから、水流の勢いを必要とする導水路としての機能を想定しづらい。掘立柱建物などの遺構は検出できなかったが、直角に曲るSD201は、屋敷地を区画した溝かもしれない。

SD203~207(図11・12) 北東側で検出した南西-北東方向の溝である。SD203は幅0.50m、深さ0.05m、SD204は幅0.50m以上、深さ0.10m以上、SD205は幅0.20m、深さ0.05m、SD206は幅0.40~0.80m、深さ0.08m、SD207は幅0.30m、深さ0.05mであり、後世の削平によりいずれも途切れている。出土遺物はなかった。埋土は暗灰黄~黄褐色細粒砂混りシルト質粘土である。

SD208(図11) 東側で検出した南北方向の溝である。幅0.50m以上、深さ0.05mで、後世の削平により途切れている。埋土は暗灰黄色極細粒砂質シルトで、出土遺物はなかった。

SD209(図11・12) 北東側で検出した南西-北東方向の溝である。幅0.40m、深さ0.07mで、後世の削平により途切れている。埋土は暗灰黄色極細粒砂質シルトで、出土遺物はなかった。

SD211(図11) 南東側で検出した南東-北西方向の溝である。幅0.50m以上、深さ0.10m以上で、埋土は灰黄褐色粘土質シルトである。出土遺物はなかった。

SD243(図11) 西側で検出した南西-北東方向の溝である。幅0.20~0.30m、深さ0.05mで、SX210

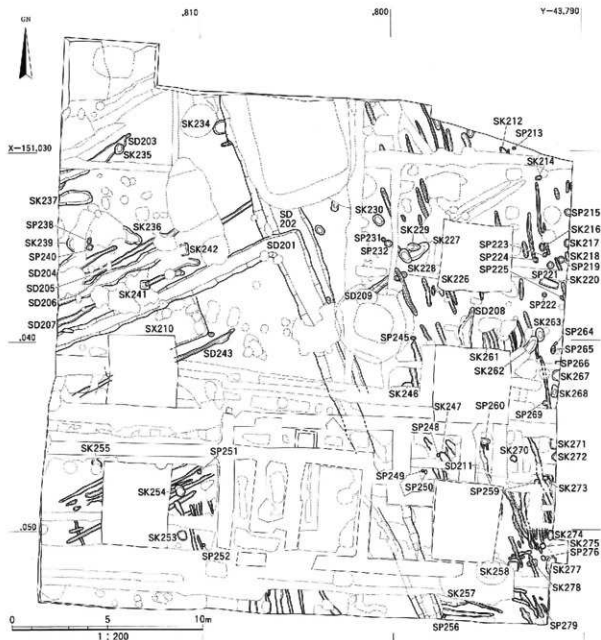


図11 中世の遺構平面図

を挟んでSD201と並行する。埋土は地山の小偽礫を含む暗茶褐色シルト質粘土である。土師器片などが少量出土した。

土壌(図11・13・14) 調査区全域より多数検出したが、出土遺物はSK239から土師器細片が出土したのみである。遺構の埋土は灰黄～暗灰黄色細粒砂混じり粘土質シルト～シルト質粘土のものが大半で、地山の小偽礫を含むものもある。以下に代表的なものを挙げる。

SK220・228・263・268は北東～東側で検出した。SK220・268はともに長方形の土壌で、SK220が東西1.00m、南北0.40m、深さ0.05m、SK268が南北0.65m、東西0.30m、深さ0.10mである。SK228・263は楕円形の土壌で、SK263が南北0.70m、東西0.45m、深さ0.07m、SK228は長軸0.80

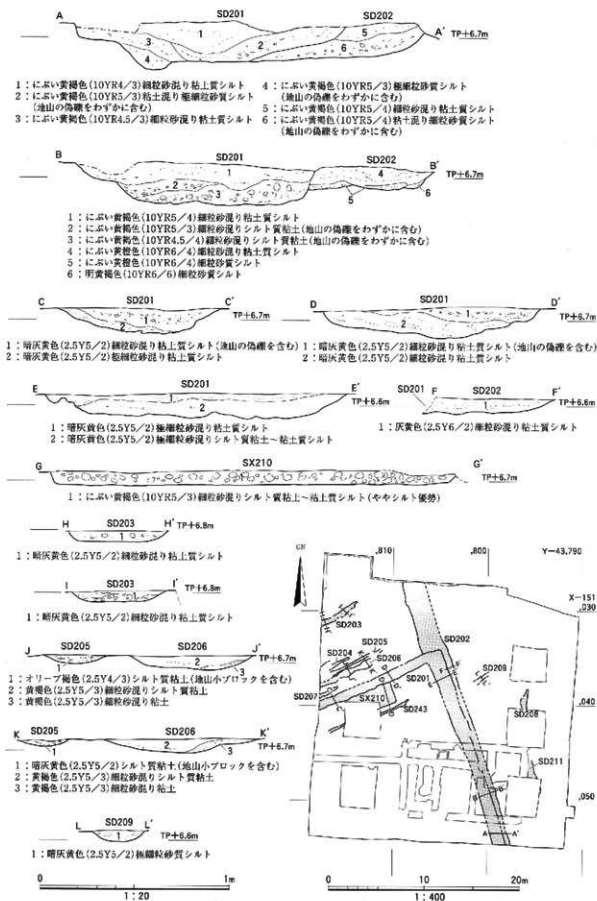


図12 SD201～209、SX210断面図

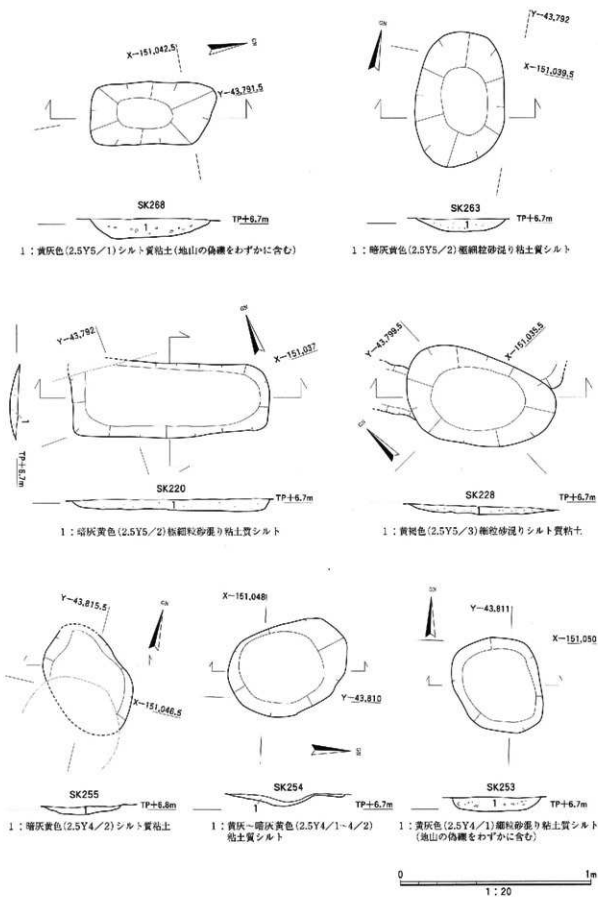


図13 中世の遺構の平面図・断面図(1)

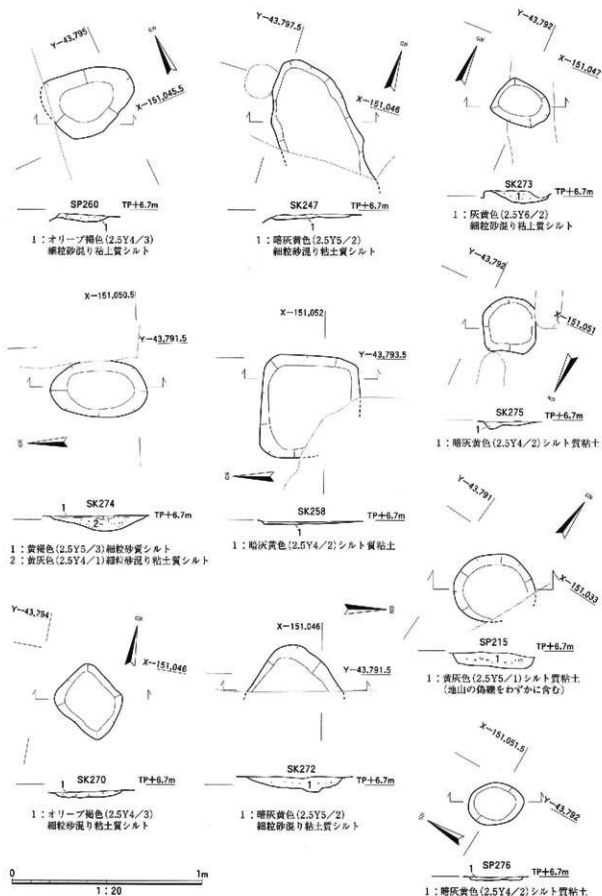


図14 中世の遺構の平面図・断面図(2)

m、短軸0.50m、深さ0.04mである。東半に広がる鋤溝群の一部を切っている。SK253・254・255は不整円形の土壌で、南西側で検出した。SK253が長軸0.65m、短軸0.45m、SK254が長軸0.50m、短軸0.45m、SK255が長軸0.50m以上、短軸0.45mである。いずれも深さは0.05m程度である。SK247・258・260・270・272・273・274・275はいずれも南東側で検出された。SK247・260・273・274は不整円形～楕円形の土壌である。SK247は長軸0.60m以上、短軸0.40m、SK260は長軸0.45m、短軸0.35mである。鋤溝群を切っている。SK273は長軸0.30m、短軸0.20m、SK274は長軸0.50m、長軸0.30mである。いずれも深さは0.05m程度である。SK258・270・272・275は方形の土壌である。それぞれ形状や配置に規則性はなかった。SK270が一辺0.30m、SK272が一辺0.40m以上、SK275が一辺0.30m、SK258が一辺0.55mで、深さ0.05mほどと浅い。

小穴 北側でおもに検出されており、直径0.30m、深さ0.05m程度のもが多い。掘立柱建物の柱穴の可能性があるが、組み合うものは確認できなかった。埋土は暗灰黄～灰黄色シルト質粘土あるいは粘上質シルトである。いくつかを上げる。

SP215は北東側、SP276は南東側で検出した。SP215は直径0.40m、深さ0.08m、SP276は直径0.25m、深さ0.03mである。

SX210 長さ5.00m以上、幅2.20m以上の長方形で、深さ約0.10mである。地山層の偽礫を含む土で埋戻していた。また、SD201とSD243の間にあり、SD201に切られていた。これらの溝と並行していることから、SD201の掘削時に周辺の整地などにもともなって形成されたものかもしれない。

鋤溝群 長さ1.00～1.50m、幅0.30m程度で、深さ数cmの溝を調査区の全域で検出した。等間隔に分布するものの、一部の溝が重複する場合もあることから畝間溝ではなく鋤溝と判断した。南東～北西方向に延びるSD201・202を境界に、東側で南東～北西方向、西側で南西～北東方向である。これらの方位は地割が反映されたものとみられる。また、西へ90度に屈曲するSD201の南側では鋤溝の分布が希薄になるが、南半は攪乱が著しいため、元来、希薄であったのか、より密に存在したものが削られたのか不明である。

第4節 近世の遺構と遺物

1) 遺構の概要

検出した遺構は小穴・土壇・溝・井戸などで、調査区の北半で認められた。いずれも他時期の遺構と同様に地山層上面で認められた。鋤溝などの耕作痕は、中世の鋤溝よりも掘り込みが浅かったとみられ、近世の地層とともに大半が削平されていた。一部の溝の方向は中世の溝や鋤溝の方向と一致することから、中世と同様の地割が継続されていたとみられる。

直径5mを超えるSX120は溜池の一部であろう。SE112もその大きさから貯水のためのもので野井戸とみられる。このほか井戸瓦と木桶枠を使ったSE113が南東側で検出された。これらは中世の溝であるSD201・202に沿うように南東―北西方向に並んでいる。遺物の大半はSX120から出土したもので、18世紀後半から19世紀のものである。ほかの遺構の出土遺物も同様であり、いずれも江戸時代後期のものと考えられる。

2) 遺構

SD101・102 北東側で検出された南西―北東方向に並行に延びる溝である。中世の鋤溝群と方向が一致する。ともに幅0.40m、深さ0.05mである。埋土は暗灰黄色極細粒砂混り粘土質シルトで、遺物はなかった。

SD103～105 北西側で検出された南西―北西方向に並行して延びる溝群である。SD103は幅0.60m、深さ0.05m、SD104は幅0.40～0.45m、深さ0.10～0.15m、SD105は幅0.25～0.40m、深さ0.08mで、埋土は暗灰黄色細粒砂質シルトである。SD104からは肥前陶磁器・土師器焙烙23(図18)・瓦が、SD105からは陶磁器・土師器が少量出土した。

SD106 南東側で検出された南東―北西方向に延びる溝で、中世のSD201・202と一部が重複する。幅0.30～0.35m、深さ0.05m、埋土はにぶい黄褐色シルト質粘土である。遺物はなかった。

SK107 南北1.45m、東西1.90m 深さ0.70mの楕円形の土壇である。底部は平坦でほぼ垂直に掘込まれていた。埋土は黄褐色細粒砂混りシルト～暗灰黄色粘土質シルトである。埋土はすべて埋戻し土で、掘込み面や壁面の遺存状況も良いことから、掘削後ただちに埋戻されたものとみられる。粘土取り穴の可能性がある。

SK109 北西側で検出され、長さ1.70m以上、幅1.70m、深さ0.14mである。近世の陶磁器・泥面子24(図18)などが出土した。

SE112 直径4mの円形の穴で野井戸とみられる。最上部の出土遺物から最終的に埋められて廃絶したのは近代である。この間には水成堆積の中粒砂～中粒砂質シルトが連続していた。深さ1.50m以下は崩落の危険があったため掘下げていないが、18世紀後半～19世紀初めの肥前陶磁器3(図18)・堺播鉢21(図18)などが出土した。

SE113 南東隅で検出された、直径1.25mの井戸側をとまう井戸である。検出面より深さ0.80m

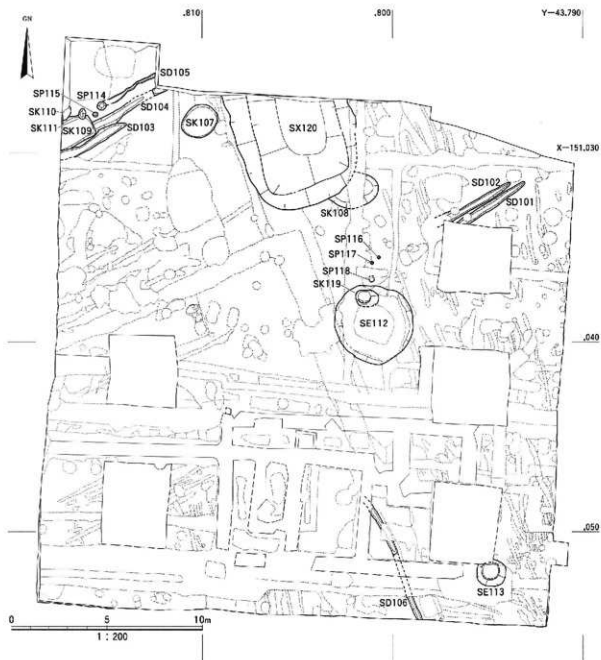


図15 近置の遺構平面図

までは近代の埋上で、それ以下は深さ2 mまで水成堆積層が続いていた。この層から江戸時代末期の遺物が出土したが、混入の可能性もある。検出面より深さ0.80 mまでは井戸瓦を用い、それ以下は木桶を井戸側として利用している。木桶は長さ75 cm、幅18 cmの板材を束ねたもので、2段以上あった。

SX120 南北方向に長く、北側が調査区外に延びている、楕円形の遺構である。南北6 m以上、東西5.80 m、深さ1.20 m以上である。貯水を目的とした溜池の一部とみられる。湧水のため掘削を安全な深度に留めており、遺構底面は確認できなかった。検出面から深さ0.80～1.00 mは埋戻し土で、地山の偽礫を含む灰黄褐～黄灰色細粒砂混りシルトと黄灰色細粒砂混りシルト質粘土である。それ以下はラミナが認められる、オリブ黄～オリブ灰色シルト質細粒砂あるいは細粒砂質シルトで、溜池

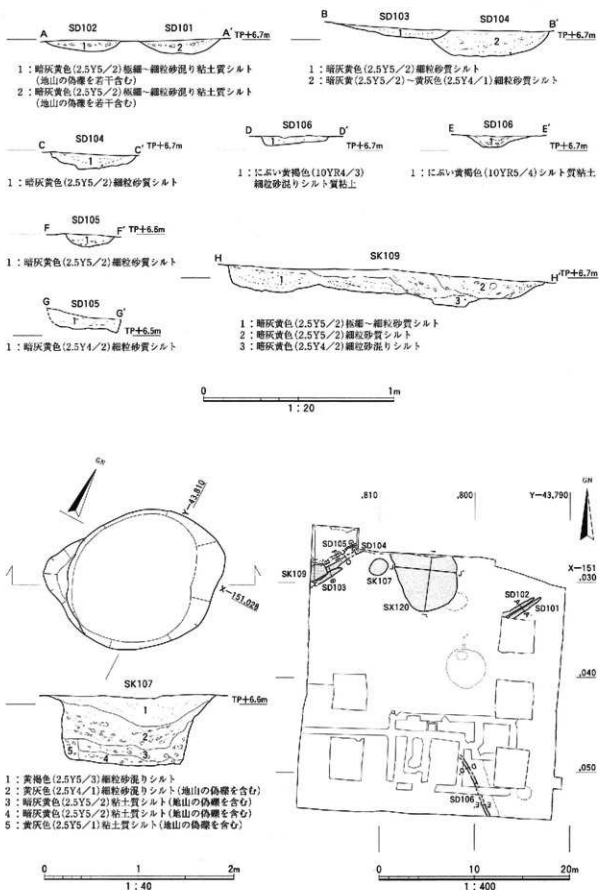
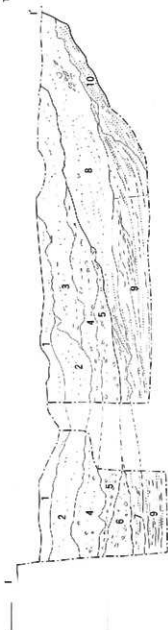


図16 近世の遺構の平面図・断面図

TP+7.0m

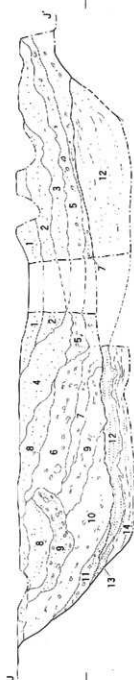
6.0m



- 1 : 礫状色 (10YR4/1) 礫状砂泥りシルト
 2 : 礫状黄色 (2.5Y5/2) 礫状砂泥りシルト
 3 : 灰黄色 (2.5Y6/2) 礫状砂泥りシルト
 4 : 灰黄色 (2.5Y5/1) 礫状砂泥りシルト (礫山の侵蝕をわずかに含む)
 5 : 灰黄色 (2.5Y4/1) 礫状砂泥り粘土質シルト (礫山の侵蝕を含む)
 6 : 礫状黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト
 7 : 灰黄色 (2.5Y4/1) - オリーブ灰色 (5GY5/1)
 礫状砂泥りシルト - 砂質シルト (クミナあり)
 8 : オリーブ灰色 (5Y6/3) シルト質細粒砂 (礫山の侵蝕、砂を含む)
 9 : 緑灰色 (10GY5/1) - 灰オリーブ色 (5Y6/2) 礫状砂質シルト (クミナあり)
 10 : 礫状黄色 (2.5Y5/2) シルト質細粒砂 (クミナあり)

TP+7.0m

6.0m



- 1 : 黄褐色 (2.5Y5/3) 礫状砂泥りシルト
 2 : 灰黄色 (2.5Y5/2) 礫状砂泥りシルト
 3 : 灰黄色 (2.5Y6/2) 礫状砂泥りシルト
 4 : 灰黄色 (2.5Y5/1) 礫状砂泥りシルト
 5 : 礫状黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト (礫山の侵蝕を含む)
 6 : 礫状黄色 (2.5Y5/2) 礫状砂泥りシルト (礫山の侵蝕を含む)
 7 : オリーブ灰色 (5Y6/3) シルト質細粒砂 (礫山の侵蝕を含む)
 8 : 礫状黄色 (2.5Y5/2) 礫状砂泥りシルト (礫山の侵蝕を含む)
 9 : 礫状黄色 (2.5Y5/2) 礫状砂泥りシルト (礫山の侵蝕を含む)
 10 : 礫状黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト (礫山の侵蝕を含む)
 11 : 礫状黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト (礫山の侵蝕を含む)
 12 : オリーブ灰色 (5Y6/3) シルト質細粒砂 (礫山の侵蝕を含む)
 13 : 灰黄色 (2.5Y5/2) 礫状砂質シルト (クミナあり)
 14 : オリーブ灰色 (2.5Y5/1) シルト質細粒砂 - 礫状砂質シルト (クミナあり)

0 1 2m
1:40

図17 SX120断面図

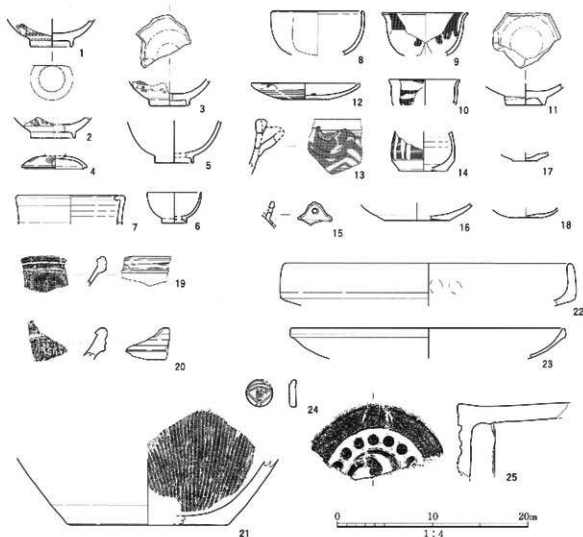
が機能していた時期の水成堆積層である。遺物は埋戻し土と水成堆積層の両方から出土したが、最上部の埋戻し土以外は18世紀後半～19世紀初め頃である。この遺構は調査区外へ大きく拡がるとみられる。遺構最上部の埋戻し土が近代以降のものであることから、江戸時代に灌漑用の溜池として掘られた後、江戸時代後期に規模を縮小しながら埋戻され、明治時代以降になって完全に埋められたと思われる。

3) 遺物

近世の遺構から出土した遺物は遺物整理箱に1箱分あり、そのうち図化したものは1～25である。

1～7は肥前磁器である。1～3は染付碗、4は染付の合子あるいは段重の蓋、5は白磁碗・6は白磁小杯、7は青磁香炉である。

8～17は陶器である。8・12・15・16は関西系陶器で、8は碗、12・16は灯明皿、15は土瓶の把手である。8の体部外面には鉄絵がわずかに見られる。12の底部内面には目跡が1箇所残る。9・14は



瀬戸美濃焼陶器で、9は緑彩の碗、14は外面に鉄化粧を施した小壺である。10は萩焼のピラ掛けの小碗である。11・13は肥前陶器で、11は底部内面を蛇の日触剥ぎする灰釉碗、13は刷毛で白泥を施した片口である。17は軟質施釉陶器で白っぽい素地に透明釉を掛ける。内面の仕上げが粗く部分的にし釉が掛らないため、小壺のような器形と考えられ、土製玩具の可能性もある。

18・22・23は土師器である。18は糸切り底の皿、22・23は焙烙で、22は難波洋三氏の分類によるD類[難波1992]、23はG類に当る。

19～21は堺摺鉢である。24は肩に「新」の字の文様をもつ泥面子である。25は巴文軒丸瓦である。

それぞれの出土遺構は、1・2・4～8・11～14・16～20・22・25はSX120、3・21はSE112、10はSE113、23はSD104、9・15・24はSK109である。SX120は18世紀前半にさかのぼる肥前磁器碗などを含むものの、18世紀後半から19世紀の灯明皿や土瓶を伴うため、埋没した時期は後者の年代と考えられる。他の遺構についても遺物は少ないが、おおむね同様の時期といえよう。

(絹川)

第IV章 難波大道をめぐる問題と検討

第1節 難波大道の研究現状と課題

1) はじめに

古代の道路は都と地方(国衙・郡衙などの役所)や寺院といった拠点を結び、人・情報の往来、物資の運搬など重要な役割を果たした。古代国家における難波の重要性はここであらうでもないが、難波大道も難波宮からまっすぐ南に延び、磯菰津路や大津道(長尾街道)などと交わって、大和に通じていたということで重要な役割を果たしたと思われる。本節では難波大道についての文献史学や歴史地理学、考古学の研究を概観したうえで、展望を示したい。

2) 研究現状

i) 文献に登場する「大道」

『日本書紀』などの文献には難波における「大道」の記事が散見される。代表的な記述を抜粋すると以下ようになる。

(A) この歳、京中に大道を作り、南門より直ちに丹比邑に至る(『日本書紀』仁德天皇14年)

(B) 難波より京への大道を置く(『日本書紀』推古天皇21年=613年)

(C) 処処の大道を修治る(『日本書紀』孝德天皇・白雉4年=653年)

(A)については、「京中に大道」ということであるから、難波京の外に延びる「難波大道」というよりも、京内を通る「朱雀大路」のことと思われる。ただ、仁徳朝に「朱雀大路」はないのは自明のことであり、これについて沢村仁氏が指摘するように、仁徳朝と孝徳朝の記事、特に土木工事の記事に類似点が多く、干支が一致するものが多いことから、孝徳朝の記載を仁徳朝にさかのぼらせる造作が行なわれたのであろう[沢村1970]。

(B)については、難波と飛鳥を結ぶ陸路が整備されたということを示すものであるが、これはその年代が示す通り、難波宮が造営される以前である。よって、難波宮の中軸線に沿った難波大道に一致するものとは考えにくいし、この道がどこを通っていたのかはわかっていない。

(C)については、孝徳朝の記事で、この前に新羅・百済の使者による「貢調献物」の記事があることから、これらの入朝に伴って難波大道が整備されたことを示しているものと思われる。

ii) 文献史学と歴史地理学的研究

難波京に係わる研究は多数あるが、ここでは難波京外に伸びる難波大道に係わる研究を抜粋して整理しておきたい。

現状の地割から大道を見いだそうとした研究は、戦前の竹山真次氏のものが端緒となろう[竹山

1935]。ここでは上記の『日本書紀』仁徳紀の記述(A)を重視し、「高津宮南門大道」が高津宮から上沙町の通りから四天王寺境内を過ぎ、阿倍野筋につながると推定しているが、岸俊男氏が指摘するようにこの推定される道の方向は真南より10° 近く西に偏しており、難波宮から真南に延びる大道とは考えられない[岸1970, pp.85-86]。むしろこの方向の道は豊臣秀吉によって造営された平野町の地割を反映しているのであろう[内田九州男1989]。

岸氏は『古事記』や『日本書紀』の記録から、仁徳朝は難波から南下して大津道や丹比道につながる道が存在したということを想定しているが[岸1970]、これは前述の沢村氏の指摘のような問題もある。ただ、明治19(1886)年の『大阪実測図』を詳細に観察し、四天王寺東辺が難波宮の中軸線の延長線と一致することを指摘した。また、東住吉区田辺本町付近や、堺市と松原市との境界付近に残って



図19 大阪平野の古代道路網(足利1991の第3図を一部改変してトレース)

いた道があり、後者は摂津国と河内国の境界であったことから、難波宮の中軸線の延長と一致することは無関係ではないと考えた。

足利健亮氏は条里地割を基に、難波宮中軸線の延長線上に延びる「南延長大道」がどこまで延びるかということを検討した[足利1978]。その結果、大道が須恵器の大生産地である陶邑まで延びていると想定した。また、氏は別の論文で、難波大道を含めた古代道路が後期難波京の時期に整備され、機能していたことに注目し、難波大道が難波京を南下し、大和につながる東西道路と交わっているという点から、古代難波の交通網の中で重要な位置を占めていたことを指摘している[足利1991]。図19はその成果である。

金田章裕氏は条里地割を基に長尾街道や竹内街道を検討するに当たって、難波大道についても併せて検討を加えている[金田1988]。特に難波大道推定ラインに接して、東西に長居条里地割が接していることに着目し、8世紀に入ってから大道を境界として踏襲して条里地割が設定されたと考えた。また、このような地割が長尾街道(大津道)を越えても続くことから、それ以南にも延びていた可能性も示唆した。その一方でこの条里地割が国境線でもあったことが作用した可能性も指摘している。

以上、簡単ではあるが、文献史および歴史地理学的研究をまとめてみた。管見による限りではあるが、難波大道についての文献史・歴史地理学的研究は大体1990年頃を境に少なくなるようである。その一方で、考古学において道路跡についての関心が高まり、各地で道路に対する研究が進展するようになる。

3) 考古学的研究と与えられた課題

第2章第2節でもふれたように、考古学的成果は上記の調査に加え、大阪府教育委員会による調査成果の計2件しかない。ただ、1980年の難波大道の発見は、難波宮の中軸線の延長に存在すると想定されていたものが実際に存在したということで非常に意義のあることである。この調査を担当した森村健一氏は、文献史学や歴史地理学的検討に加え、実際に難波大道を踏査することによって、古道の復元を試みている[森村1981]。また、難波大道の時期については、手掛かりが少ないとしながらも、7世紀後半の須恵器が伴うという認識から前期難波宮造営前後と考えた。なお、森村氏は難波大道について長尾街道を越えて、竹ノ内街道に繋がると想定していて、大阪府教育委員会の指定とは異なるが、これは足利氏などの歴史地理学の成果を受けたものと思われる[森村1994]。

一方、大阪市内では難波大道に関する痕跡はまったく見つかっていないのに加え、近隣で飛鳥・奈良時代の遺物が出土することはほとんどなく、遺構も見つかっていない。こういった条件の中で難波大道についてさらに追求するのであれば、前後の時期の状況から存続時期を推測したり、本章第2節で行っているような地形との関係の検討することが必要であろう。特に、難波大道跡の発掘調査では中世の作土層が覆っていることが多いことから、少なくともこの時期には廃絶していたのであろう。また、難波大道跡に重なる法楽寺や山坂神社の創建年代との係わりで廃絶時期を想定することもできるが、創建期よりこの範囲にあったのかどうかという検討は必要である。

また、大和川今池遺跡を除くと、難波大道跡の近隣で飛鳥・奈良時代の遺構は検出されていないが、

調査がまだ及んでいないというのも実態である。近年調査された滋賀^{せき}県の関津遺跡では、「田原道」と推定される道路に沿って、建物跡などが見つかっている[滋賀県埋蔵文化財センター2006]。こういった事例は興味深いが、同様な状況が難波大道跡で存在するのかどうかについては、今後の調査に左右される場所である。なお、道路沿いに結節点の役割を果たす集落がないのであれば、大道が通過点の役割を果たしたのみであるということと、道路沿いの整備が終わらないまま道路が廃絶してしまったことと、2通りの可能性を考えることができる。ただ、課題は考古学的情報が少ないことに尽きる。今後の調査の展開に期待したい。

(寺井)

第2節 難波大道跡と周辺の地理的環境

今回の調査では難波大道の存在を示すような遺構や遺物は認められなかった。ただし、調査区内においては古代の地層がまったく残っておらず、検出された古代以前とみられる遺構群のほとんどはごく浅いものばかりであることから、この時期の遺構面が大きく削平を受けた可能性は残る。いずれにせよ、大阪市内において難波大道の存在を示す証拠を今回の調査でも得ることはできなかった。

さて、前節ではおもに考古学的な研究課題を示したが、本節では難波大道跡について、地形図等の資料から得られる基本的な情報を整理して今後の研究の備えとしておきたい。

難波大道の直接的な証拠は、1980年に大阪府松原市の大和川今池遺跡で発見された南北道路跡である〔大和川・今池遺跡調査会1981〕。第Ⅱ章で述べたように、幅員18m(6丈)のこの道路跡は、幅1.2mの側溝を伴い、延長170mにわたって認められた。1994年にも北へ30mほど離れた地点において同様の道路跡が見つかった〔大阪府教育委員会1995〕。したがって、難波宮から長尾街道(大津道)にわたり、全通した道路の存在はともかく、7世紀後半から8世紀初めにかけて難波宮中軸線の延長上に当時の幹線級の直線南北道路があったことは確かであろう。

岸俊男氏は明治19(1886)年測量の5千分の1『大阪実測図』から、四天王寺の東側に難波宮中軸線



図20 四天王寺東側の方格地割と南北道路
明治19(1886)年測量『大阪実測図』より

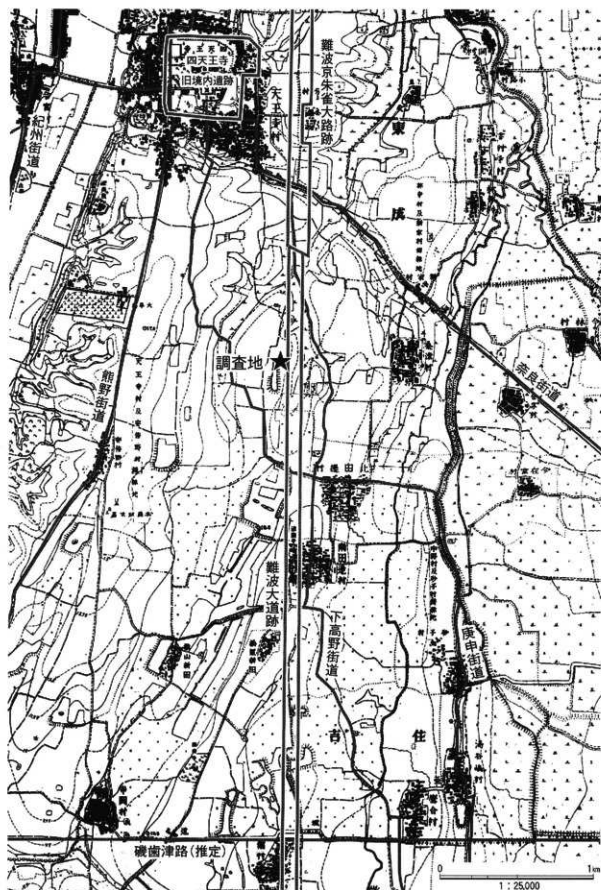


図21 調査地と難波大道跡周辺の地形図
明治19(1886)年測量2万分の1複製地形図に加筆



図22 調査地と難波大道跡周辺の航空写真
昭和23(1948)年米軍撮影写真

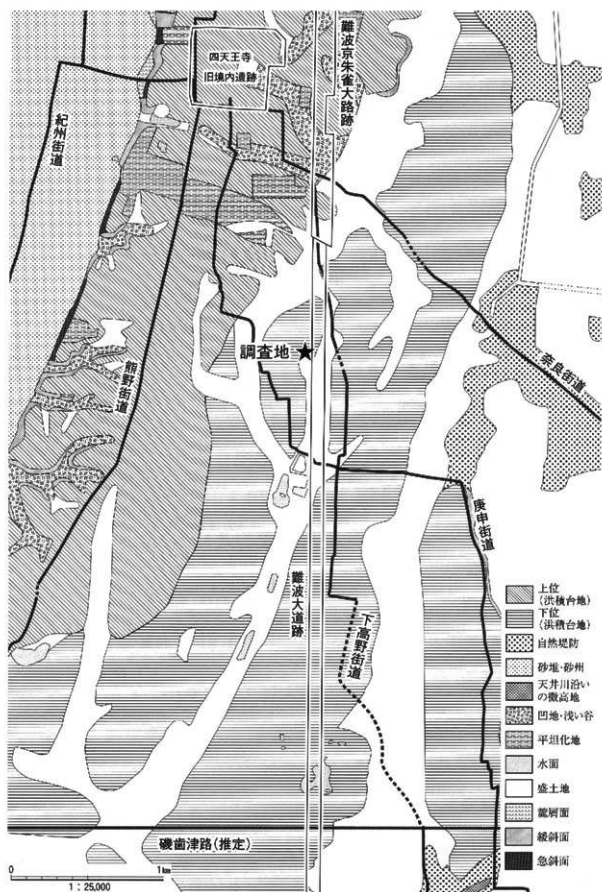


図23 調査地と難波大道路周辺の土地条件
土地条件図「大阪東南部」[国土地理院1983]に加筆

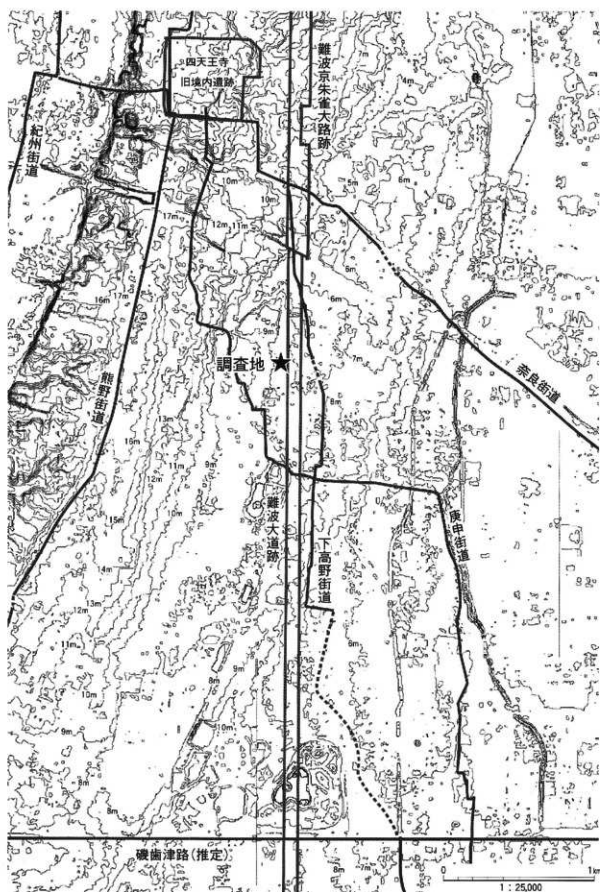


図24 調査地と難波入道跡周辺の等高線図

等高線図は国土地理院数値地図5mメッシュ(標高)「京都及大阪」をもとにカシミール3Dで作成

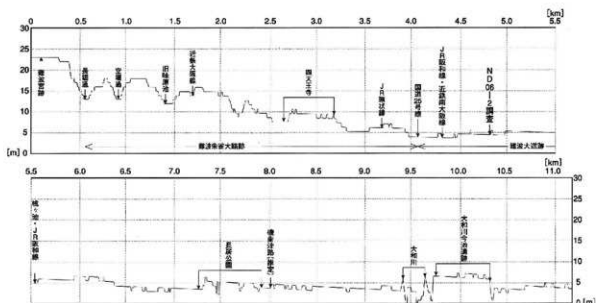


図25 難波大道跡の縦断面図

と東辺が一致する方格地割が南北に2箇所認められることを指摘した[岸1970]。この方格地割は1辺約265mであり、藤原京の1坊と同じである。四天王寺東側の方格地割に沿った中軸線の延長上を通る南北道路は明治19(1886)年測量の2万分の1「仮製図」(図21)のみならず、昭和23(1948)年に米軍が撮影した航空写真(図22)にも認められ、現在も都市計画道路の「森之宮・勝山線」として残っている。

しかし、仮製図のような古い地形図で確認できる難波宮中軸延長線上の南北道路は、奈良街道以南になると急に認められなくなる。ふたたびこうした南北道路が見られるのは桃ヶ池を越えた南田辺以南で、特に古代の幹線道路である、東西の直線道路の推定磯歯津路と接している長居公園の南端(長居公園通)以南では、難波宮の中軸延長線は松原市内の長尾街道(大津道)に至るまで断続的ながら南北道路が認められる。この推定磯歯津路以南の南北ラインは摂津・河内の国境となっており、この国境も平野区と東住吉区の区境として現在まで踏襲されている。

大阪市内の南部においてふたたび難波宮の中軸延長線の存在が顕著となるのは、この地域の条里地割と深い関係がある。大阪平野西半の摂津国住吉郡と河内国丹比郡では正方位の条里が広く分布しており、国境をまたいで連続している[服部昌之1988]。難波大道の設置と住吉郡の条里施行の時期との関係を検討しなければならないが、この地域の条里施行において難波宮の中軸延長線が条里の計画線として取込まれていたことは間違いないだろう。

一方で、こうした条里地割は上町台地にまで及んでおらず、桃ヶ池以北の上町台地側では、その地割も台地の地形に影響を受けており、近世の字名にもそうした自然地形に由来する名称が散見される。今回の調査で見つかった中世の溝や鋤溝群の方向も自然地形を反映したものと考えている。

洪積台地である上町台地は東西方向の侵食谷が発達している(図23)。現在に至るまでに、整地や盛土をされては平坦化しているところも多いが、現地形の等高線図(図24)を見ても、台地部は相当に入り組んだ複雑な地形となっている。こうした地形の改変を行わなければ、台地上を南北に直線移動

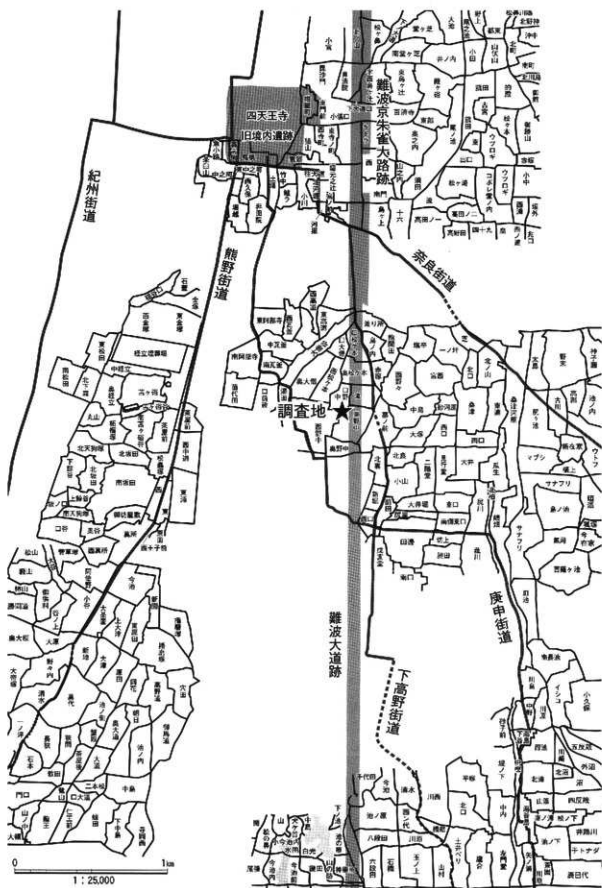


図26 難波大道跡の旧字名

『大阪地籍地図』『東成郡誌』を用いて復元した。字の場所や範囲が特定できなかったものは除いてある。

することは容易ではなかったものとみられる。

前期難波宮の造営時には、宮域を中心に南北1.5km、東西1kmにわたって谷を埋める整地が行われたことが指摘されている[寺井2004]。特に、「朱雀門」(宮城南門)の南側は重点的に整備され、上町谷や清水谷などの侵食谷は埋められた。しかし、古代において、そうした土木工事を経ても大きな谷の窪みが完全に解消されることはなかったようである[寺井2004]。

図25は難波宮の大極殿を基点にした難波大道の縦断面図である。台地の高所部である難波宮は標高23mで、上町谷(長堀通)や清水谷(空堀)の大きな窪みを越えて近鉄大阪線南に位置する細工谷遺跡のあたりから徐々に高度を下げている。ただし、上町谷や清水谷は前期難波宮造営期には一部で窪みとして残っていたものの、一定の整地はされていた[寺井2004]。縦断面図に現れる大きな窪みは、豊臣期に行われた大坂城惣構造営にともなう大規模な土木工事や近世以降の都市開発による影響を考慮しておく必要がある。ただし、地形の凹凸が激しいのは難波宮から四天王寺にかけての範囲で、それ以南はそれほど顕著な高低差は認められない。つまり、南部では条里施行や道路の造成工事も比較的容易であったということになるだろう。

ところで、近世に至るまでに当地域ではいくつかの街道が形成されるようになる。その方向や経路はいずれも難波大道とはまったく異なっている。

そのなかでも熊野街道は古来より利用されてきた古道であり、平安時代には熊野参詣や住吉行幸など、住吉・和泉・紀州に至る幹線道路となった。これは上町台地の西丘陵部の脊梁線上を南進するルートである。

南東方向に延びる奈良街道は、明治時代以前は平野道と呼ばれ、河堀口から平野郷を経由して奈良に向かう街道である。この街道は谷筋を抜ける比較的平坦な経路が選択されている。

庚申街道は天上寺南門を基点とし、庚申堂前を通り田辺へ至る街道であり、下高野街道は大道3丁目付近で奈良街道から分岐して田辺へ向かい南進する。ただし、下高野街道の場合、田辺に向かう南北道はもとは3尺とも5尺幅ともいわれる細い野良道で、明治23(1890)年に地元住民らによって整備されたものである。

これらの街道はいずれも台地の尾根線や谷筋を辿り、集落の間を結びながらなるべく平坦な経路が選ばれている。近世村落も上町台地西縁や自然堤防上に形成されており、中近世に至っては、上町台地西縁において難波大道の痕跡は認められないようである。

表1～4は、これまでの大阪市内で実施された立会調査や発掘調査の一覧である。既往の調査においても難波大道の明確な痕跡を見いだせない状況にある。ほとんどの場合、表土下は中世以降の作土層であり、古代以前の遺物包含層が遺存しているところは少い。また、地表から地山面までの深さは0.5m未満と浅いところが大半で、ほとんどが削平を受けている。

ただし、古墳時代の遺構面が残されている場合も認められ、ND00-16次調査では中世とされるが南北方向の溝が見つかった(表4・216)。古代の遺構が良好に遺存する場合も十分に想定され、今後の成果に期待するところも大きい。

(網川)

表1 鍾波大道路で行われた既往の調査(1)

番号	道路名	調査年度	年度	調査機関	調査地	調査内容	経度(経緯)	緯度(経緯)
1	鍾波大道路	ND86-2	1986	〇会調査	東佐古区東田22-11-19	地表下0.37mで地山面を掘削。	34°37'12"	135°31'21"
2	鍾波大道路	ND87-1	1987	〇会調査	東佐古区東田21-1-20	地表下0.55mで地山面を掘削。	34°36'39"	135°31'21"
3	鍾波大道路	ND87-2	1987	〇会調査	東佐古区東田1-113a	地表下1mで地山面を掘削。	34°36'44"	135°32'4"
4	鍾波大道路	ND87-3	1987	〇会調査	東佐古区東田44-4-8	地表下2mで掘削。1m以下は砂礫質シルト粘土層。	34°35'50"	135°31'23"
5	鍾波大道路	ND88-1	1988	〇会調査	東佐古区東田25-12-22	地表下2.2mで地山面を掘削。地表下1.5m以下は砂礫質シルト粘土層。	34°37'07"	135°31'22"
6	鍾波大道路	ND88-2	1988	〇会調査	東佐古区東田21-2-34	地表下2.2mで掘削。1m以下は砂礫質シルト粘土層。	34°37'55"	135°31'23"
7	鍾波大道路	ND88-3	1988	〇会調査	東佐古区東田21-7-25	地表下0.15mで地山面を掘削。上部でシルト(時間により凝結)。	34°37'18"	135°31'23"
8	鍾波大道路	ND88-3	1988	〇会調査	東佐古区東田1-13-19	地表下1.1mで地山面を掘削。	34°37'37"	135°31'22"
9	鍾波大道路	ND89-1	1989	〇会調査	東佐古区東田44-4-5-1	地表下1mで地山面を掘削。	34°36'52"	135°31'21"
10	鍾波大道路	ND89-3	1989	〇会調査	東佐古区東田23-13-2	地表下0.7mで地山面を掘削。0.4-0.55mに中程度の堆積物を含む。	34°37'17"	135°31'27"
11	鍾波大道路	ND89-4	1989	〇会調査	東佐古区東田21-9-25	地表下0.2mで地山面を掘削。	34°36'18"	135°31'22"
12	鍾波大道路	ND89-5	1989	〇会調査	東佐古区東田21-4-1	地表下0.2mで地山面を掘削。	34°37'12"	135°31'19"
13	鍾波大道路	ND89-6	1989	〇会調査	東佐古区東田1-10-9	地表下0.75mで地山面を掘削。	34°37'42"	135°31'22"
14	鍾波大道路	ND89-7	1989	〇会調査	東佐古区東田1-12-4	2ヶ所を掘削。地表下0.8-1.15mで明色砂質土層(古代砂)を含む。	34°37'41"	135°31'24"
15	鍾波大道路	ND89-8	1989	〇会調査	東佐古区東田21-22-16	地表下1mで地山面を掘削。	34°36'20"	135°31'21"
16	鍾波大道路	ND89-9	1989	〇会調査	東佐古区東田22-10-6	地表下1mで地山面を掘削。	34°37'9"	135°31'20"
17	鍾波大道路	ND90-01	1990	〇会調査	東佐古区東田22-14-18	地表下0.45mで地山面を掘削。	34°37'6"	135°31'19"
18	鍾波大道路	ND90-02	1990	〇会調査	東佐古区東田1-13-24	地表下0.5mで掘削。土層の厚み。	34°37'37"	135°31'21"
19	鍾波大道路	ND90-03	1990	〇会調査	東佐古区東田44-3-4-9	地表下0.3mで地山面を掘削。	34°36'17"	135°31'23"
20	鍾波大道路	ND90-04	1990	〇会調査	東佐古区東田2-13-2	地表下0.5mで地山面を掘削。	34°37'27"	135°31'18"
21	鍾波大道路	ND90-05	1990	〇会調査	東佐古区東田21-6-20	地表下0.5mで地山面を掘削。	34°37'19"	135°31'20"
22	鍾波大道路	ND90-06	1990	〇会調査	東佐古区東田1-13-24	地表下0.75mで地山面を掘削。	34°37'37"	135°31'21"
23	鍾波大道路	ND90-07	1990	〇会調査	東佐古区東田1-6-4	2ヶ所を掘削。地表下0.3-0.45mで地山面を掘削。	34°37'46"	135°31'23"
24	鍾波大道路	ND90-08	1990	〇会調査	東佐古区東田22-17-14	地表下0.6mで地山面を掘削。地表下0.5m以下は砂礫質シルト粘土層。	34°37'25"	135°31'21"
25	鍾波大道路	ND90-09	1990	〇会調査	東佐古区東田22-17-18	地表下0.85mで地山面を掘削。地表下0.5mの地山の色相が上層。	34°37'59"	135°31'22"
26	鍾波大道路	ND90-10	1990	〇会調査	東佐古区東田22-17-14	6世紀の遺物(土器・土器・土器)を掘削。T2+9mで地山面。	34°37'25"	135°31'21"
27	鍾波大道路	ND90-11	1990	〇会調査	東佐古区東田22-14-9	地表下0.54mで地山面を掘削。0.38-0.54mで黄褐色土層を掘削。	34°37'47"	135°31'20"
28	鍾波大道路	ND90-12	1990	〇会調査	東佐古区東田23-18-12	1ヶ所を掘削。地表下0.3mで地山面を掘削。	34°37'25"	135°31'24"
29	鍾波大道路	ND91-01	1991	〇会調査	東佐古区東田1-7-16	地表下0.6mで地山面を掘削。	34°37'44"	135°31'21"
30	鍾波大道路	ND91-03	1991	〇会調査	東佐古区東田23-4-17	地表下0.55mで地山面を掘削。	34°36'16"	135°31'21"
31	鍾波大道路	ND91-04	1991	〇会調査	東佐古区東田22-9-6	地表下0.4mで地山面を掘削。	34°36'56"	135°31'21"
32	鍾波大道路	ND91-05	1991	〇会調査	東佐古区東田21-10-7	地表下1m以下で掘削。すべて泥質層。	34°36'20"	135°31'20"
33	鍾波大道路	ND91-06	1991	〇会調査	東佐古区東田22-9-4	地表下0.5mで掘削。0.7mで砂礫質シルト粘土層を掘削。	34°36'37"	135°31'22"
34	鍾波大道路	ND91-07	1991	〇会調査	東佐古区東田22-9-18	地表下0.15mで地山面を掘削。	34°36'17"	135°31'22"
35	鍾波大道路	ND91-08	1991	〇会調査	東佐古区東田22-12-12	2ヶ所を掘削。地表下0.4-0.47mで地山面を掘削。	34°37'07"	135°31'21"
36	鍾波大道路	ND91-11	1991	〇会調査	東佐古区東田23-22-34	地表下1.8mで地山面を掘削。0.38-0.54mで黄褐色土層を掘削。	34°36'25"	135°31'24"
37	鍾波大道路	ND91-12	1991	〇会調査	東佐古区東田44-4-1-24	地表下1.2mで地山面を掘削。	34°36'25"	135°31'21"
38	鍾波大道路	ND91-13	1991	〇会調査	東佐古区東田22-9-18	地表下0.4mで地山面を掘削。	34°36'46"	135°31'28"
39	鍾波大道路	ND91-14	1991	〇会調査	東佐古区東田22-16-13	地表下1.13m以下で掘削。0.55m以下で砂礫質土層を掘削。	34°36'22"	135°31'22"
40	鍾波大道路	ND91-15	1991	〇会調査	東佐古区東田22-9-19	地表下0.6mで地山面を掘削。	34°36'20"	135°31'22"
41	鍾波大道路	ND91-16	1991	〇会調査	東佐古区東田22-9-10-3	地表下0.5mで地山面を掘削。T層に中程度の堆積物を含む。	34°36'27"	135°31'22"
42	鍾波大道路	ND91-17	1991	〇会調査	東佐古区東田22-17-6	地表下1.2m以下で掘削。1.0-1.2mで中程度の堆積物を含む。	34°37'37"	135°31'21"
43	鍾波大道路	ND91-18	1991	〇会調査	東佐古区東田22-13-10	地表下0.95mで地山面を掘削。上部は砂礫質0.2mの土層を掘削。	34°37'27"	135°31'21"
44	鍾波大道路	ND91-19	1991	〇会調査	東佐古区東田23-1-20	地表下0.8mで地山面を掘削。0.22-0.8m以下は中程度の堆積物を含む。	34°37'31"	135°31'21"
45	鍾波大道路	ND92-03	1992	〇会調査	東佐古区東田23-3-14	地表下0.6mで地山面を掘削。	34°37'13"	135°31'18"
46	鍾波大道路	ND92-05	1992	〇会調査	東佐古区東田22-10-3	地表下0.7mで地山面を掘削。	34°37'43"	135°31'21"
47	鍾波大道路	ND92-06	1992	〇会調査	東佐古区東田22-18-2	地表下0.2mで地山面を掘削。	34°36'20"	135°31'22"
48	鍾波大道路	ND92-07	1992	〇会調査	東佐古区東田22-18-17	地表下0.3-0.5mで地山面を掘削。	34°37'36"	135°31'21"
49	鍾波大道路	ND92-08	1992	〇会調査	東佐古区東田22-22-11	地表下1.2m以下で掘削。1m以下はシルト質の堆積物を含む(粘土を含む)。	34°36'38"	135°31'23"
50	鍾波大道路	ND92-09	1992	〇会調査	東佐古区東田22-17-21	地表下1.05mで地山面を掘削。	34°37'56"	135°31'20"
51	鍾波大道路	ND92-11	1992	〇会調査	東佐古区東田22-12-13	地表下0.5mで地山面を掘削。1層の高気圧シルト質堆積物層から、地表層に砂礫質を含む。	34°37'46"	135°31'23"
52	鍾波大道路	ND92-12	1992	〇会調査	東佐古区東田22-9-25	地表下1mで地山面を掘削。上部に厚み10cmの黒色層。	34°36'18"	135°31'22"
53	鍾波大道路	ND92-13	1992	〇会調査	東佐古区東田23-13-20	地表下0.85m以下で掘削。すべて泥質土層。	34°36'8"	135°31'23"
54	鍾波大道路	ND92-14	1992	〇会調査	東佐古区東田22-1-3	地表下1.6m以下で掘削。1m以下は泥質土層。以下は中程度の堆積物。	34°36'27"	135°31'23"
55	鍾波大道路	ND92-15	1992	〇会調査	東佐古区東田22-8-3	地表下0.46mで地山面を掘削。	34°36'15"	135°31'18"
56	鍾波大道路	ND92-16	1992	〇会調査	東佐古区東田23-12-16	地表下0.18mで地山面を掘削。	34°36'27"	135°31'22"
57	鍾波大道路	ND92-17	1992	〇会調査	東佐古区東田22-10-16	地表下0.66mで地山面を掘削。0.35m以下は中程度の堆積物を含む。	34°36'27"	135°31'23"
58	鍾波大道路	ND92-18	1992	〇会調査	東佐古区東田23-16-12	地表下0.66mで地山面を掘削。0.35m以下は中程度の堆積物を含む。	34°36'27"	135°31'23"
59	鍾波大道路	ND93-02	1993	〇会調査	東佐古区東田22-7-21	2ヶ所を掘削。地表下0.7-1.25mで地山面を掘削。0.45m以下は中程度の堆積物を含む。	34°37'31"	135°31'19"
60	鍾波大道路	ND93-03	1993	〇会調査	東佐古区東田23-3-5	2ヶ所を掘削。うち1ヶ所で地表下1.36mで地山面を掘削。	34°37'22"	135°31'20"
61	鍾波大道路	ND93-05	1993	〇会調査	東佐古区東田22-11-2	地表下0.9mで地山面を掘削。地表下0.5mで地山面を掘削。	34°37'41"	135°31'20"
62	鍾波大道路	ND93-06	1993	〇会調査	東佐古区東田22-12-16	地表下1.35mで地山面を掘削。1.3mで泥質シルト質堆積物層を掘削。	34°36'33"	135°31'23"
63	鍾波大道路	ND93-07	1993	〇会調査	東佐古区東田23-8-8	地表下0.9mで地山面を掘削。	34°36'12"	135°31'22"
64	鍾波大道路	ND93-08	1993	〇会調査	東佐古区東田23-15-17	2ヶ所を掘削。地表下0.8mで地山面を掘削。上部は黄褐色砂質シルト質堆積物層(0.8m以下は泥質土層)。	34°37'26"	135°31'22"

表2 難波大道路で行われた既往の調査(2)

番号	調査年度	調査機関	調査者	調査内容	精度(GPS54)	精度(GPS64)	
65	難波大道路	N93-09	1993	立会調査 東住吉区山崎2-7-19	地表下0.4mで地山面を検出。上層で中程度の遺物を含む層を確認。	34°37'30"	135°31'19"
66	難波大道路	N93-10	1993	立会調査 阿倍野区文の丘3-15-17	地表下1.4mまで掘削。0.35m以下は水成堆積層。	34°38'6"	135°31'21"
67	難波大道路	N93-11	1993	立会調査 阿倍野区文の丘4-7-12	地表下0.15mで地山面を検出。	34°38'4"	135°31'22"
68	難波大道路	N93-12	1993	立会調査 東住吉区山崎3-10-7	地表下0.25mで地山面を検出。	34°37'17"	135°31'23"
69	難波大道路	N93-13	1993	立会調査 東住吉区山崎3-11-11	地表下1.8mで地山面を検出。古墳時代(7)の柱穴を確認。	34°37'20"	135°31'24"
70	難波大道路	N93-14	1993	立会調査 東住吉区山崎3-2-13	地表下0.85mまで掘削。0.6m以下は中程度の土層。	34°37'30"	135°31'22"
71	難波大道路	N93-15	1993	立会調査 東住吉区山崎3-5-7	地表下0.15mで地山面を検出。	34°37'4"	135°31'23"
72	難波大道路	N93-16	1993	立会調査 東住吉区山崎3-24-6	地表下0.5mで地山面を検出。	34°37'8"	135°31'23"
73	難波大道路	N93-17	1993	立会調査 東住吉区山崎3-24-6	地表下0.5mで地山面を検出。	34°36'53"	135°31'19"
74	難波大道路	N93-18	1993	立会調査 阿倍野区豊津3-7-7	2ヶ所を掘削。地表下0.25m、1.25mで地山面を検出。後者は土層に大規模な空洞。	34°38'14"	135°31'23"
75	難波大道路	N93-19	1993	立会調査 東住吉区山崎3-1-7	地表下0.1mで地山面を検出。	34°37'14"	135°31'21"
76	難波大道路	N93-20	1993	立会調査 東住吉区山崎3-5-7	地表下0.4mで地山面を検出。	34°37'22"	135°31'23"
77	難波大道路	N93-21	1993	立会調査 阿倍野区文の丘3-6-10	地表下1.8mで地山面を検出。現代遺物以下は遺物の水成堆積層。	34°38'11"	135°31'18"
78	難波大道路	N93-22	1993	立会調査 東住吉区山崎3-23	地表下0.8mで地山面を検出。現代遺物以下は遺物の水成堆積層。	34°37'9"	135°31'22"
79	難波大道路	N93-23	1993	立会調査 東住吉区山崎3-2-3-21	2ヶ所を掘削。地表下0.5-0.95mで地山面を検出。	34°36'15"	135°31'23"
80	難波大道路	N93-24	1993	立会調査 阿倍野区文の丘3-3-31	地表下1.2mまで掘削。全て遺物。	34°38'39"	135°31'23"
81	難波大道路	N93-25	1993	立会調査 阿倍野区文の丘3-3-31	地表下0.1-1.4mで地山面を検出。土層は互層を含む中程度の遺物を含む層。	34°37'54"	135°31'15"
82	難波大道路	N93-26	1993	立会調査 阿倍野区文の丘3-3-31	地表下0.7mで地山面を検出。	34°38'2"	135°31'23"
83	難波大道路	N93-27	1993	立会調査 阿倍野区山崎3-4-3	地表下0.8mで地山面を検出。上層は土層等を含む中程度の遺物を含む層。地山面以下は遺物。	34°37'34"	135°31'15"
84	難波大道路	N93-28	1993	立会調査 阿倍野区天王寺町南2-15-17	地表下2.0mで掘削。1.2m以下は遺物の水成堆積層。	34°38'36"	135°31'20"
85	難波大道路	N93-29	1993	立会調査 東住吉区山崎3-1-9-16	地表下0.4-0.5mで地山面を検出。中程度の遺物を含む層。	34°37'36"	135°31'21"
86	難波大道路	N93-30	1993	立会調査 東住吉区山崎3-7-4	地表下0.3mで地山面を検出。	34°37'19"	135°31'21"
87	難波大道路	N93-31	1993	立会調査 東住吉区山崎3-14-9	地表下0.15-0.36mで地山面を検出。上層に土層等を含む遺物を含む層を確認。	34°37'39"	135°31'21"
88	難波大道路	N93-32	1993	立会調査 阿倍野区豊津3-14-3	12-13段の遺物・土層・砂層を掘削。土層は互層を含む中程度の遺物を含む層。	34°37'54"	135°31'21"
89	難波大道路	N93-33	1993	立会調査 東住吉区山崎3-14-9	地表下0.6mで地山面を検出。	34°36'16"	135°31'23"
90	難波大道路	N94-02	1994	立会調査 阿倍野区文の丘3-6-10	地表下3.2mで掘削。地表下は遺物とみられる水成堆積層。	34°38'30"	135°31'21"
91	難波大道路	N94-03	1994	立会調査 阿倍野区文の丘4-21-18	地表下0.2mで地山面を検出。上層でシルトを含む層。	34°37'57"	135°31'20"
92	難波大道路	N94-04	1994	立会調査 東住吉区山崎3-10-6	地表下0.25mで地山面を検出。	34°37'17"	135°31'23"
93	難波大道路	N94-05	1994	立会調査 東住吉区山崎3-11-4	地表下1.1mで地山面を検出。0.5-0.6mで中程度の遺物を含む層。	34°37'12"	135°31'22"
94	難波大道路	N94-06	1994	立会調査 東住吉区山崎3-7-26	地表下0.3mで地山面を検出。	34°37'18"	135°31'22"
95	難波大道路	N94-07	1994	立会調査 阿倍野区文の丘4-21-20	地表下0.5mで地山面を検出。上層は中程度の遺物を含む層。	34°37'57"	135°31'20"
96	難波大道路	N94-08	1994	立会調査 東住吉区山崎3-4-2	地表下0.6mで地山面を検出。	34°36'14"	135°31'22"
97	難波大道路	N94-09	1994	立会調査 東住吉区山崎3-4-16-23	地表下0.9-1.1mで地山面を検出。中程度の遺物(シルト)を確認。	34°35'55"	135°31'25"
98	難波大道路	N94-10	1994	立会調査 東住吉区山崎3-17-15	地表下0.3mで地山面を検出。土層は中程度の遺物を含む層。	34°37'23"	135°31'20"
99	難波大道路	N94-11	1994	立会調査 東住吉区山崎3-10-3	地表下0.8mで地山面を検出。	34°37'17"	135°31'22"
100	難波大道路	N94-12	1994	立会調査 阿倍野区文の丘4-24	地表下1.1mで地山面を検出。中程度の土層。	34°37'54"	135°31'23"
101	難波大道路	N94-13	1994	立会調査 東住吉区山崎3-17-15	地表下0.82mで地山面を検出。土層は中程度の遺物を含む層。	34°37'35"	135°31'20"
102	難波大道路	N94-14	1994	立会調査 東住吉区山崎3-17-15	地表下0.25mで地山面を検出。土層は古墳時代(7)の柱穴。	34°37'23"	135°31'20"
103	難波大道路	N94-15	1994	立会調査 東住吉区山崎3-17-15	地表下1.4mで地山面を検出。6枚の土層・砂層・土層・砂層等を確認。	34°37'25"	135°31'20"
104	難波大道路	N94-17	1994	立会調査 東住吉区山崎3-4-13	地表下1.4mまで掘削。0.4m以下は遺物の水成堆積層。	34°36'56"	135°31'20"
105	難波大道路	N94-18	1994	立会調査 東住吉区山崎3-16-3	地表下0.6mで地山面を検出。土層に砂層等(時局不明)。	34°37'27"	135°31'20"
106	難波大道路	N94-19	1994	立会調査 東住吉区山崎3-1-10	地表下0.8mで地山面を検出。0.6m以下は中程度の遺物を含む層。	34°37'30"	135°31'22"
107	難波大道路	N94-20	1994	立会調査 阿倍野区文の丘4-18-21	地表下1.7mで地山面を検出。土層で中程度の遺物を含む層。	34°37'58"	135°31'21"
108	難波大道路	N94-21	1994	立会調査 阿倍野区文の丘4-17-22	地表下0.7mで地山面を検出。上層は中程度の遺物を含む層。	34°37'59"	135°31'23"
109	難波大道路	N95-01	1995	立会調査 東住吉区山崎3-27-18	地表下0.8mで地山面を検出。土層に砂層等を含む層を確認。	34°37'24"	135°31'22"
110	難波大道路	N95-02	1995	立会調査 東住吉区山崎3-18-30	地表下1.25mで地山面を検出。上層は遺物の土層。	34°37'36"	135°31'22"
111	難波大道路	N95-04	1995	立会調査 東住吉区山崎3-1-9-2	地表下0.2-0.25mで地山面を検出。	34°37'42"	135°31'24"
112	難波大道路	N95-05	1995	立会調査 阿倍野区文の丘3-2-27	東住吉区山崎3-2-27。地表下0.25mと1.15mで地山面を検出。地形は概ね平坦で高低差はわずか。東側は古代・中世の遺物が見られる。	34°38'28"	135°31'20"
113	難波大道路	N95-07	1995	立会調査 東住吉区山崎3-3-7	地表下1.4mで地山面を検出。	34°37'30"	135°31'23"
114	難波大道路	N95-08	1995	立会調査 東住吉区山崎3-2-26	地表下0.55mで地山面を検出。	34°37'14"	135°31'23"
115	難波大道路	N95-08	1995	立会調査 阿倍野区天王寺町南2-1-2	地表下1.1mで掘削。古代・近代の遺物(土層・砂層等)を確認。	34°38'28"	135°31'21"
116	難波大道路	N95-10	1995	立会調査 東住吉区山崎3-4-2	地表下1.1mで地山面を検出。0.8m以下は中程度の遺物を含む層。	34°36'25"	135°31'21"
117	難波大道路	N95-11	1995	立会調査 阿倍野区文の丘3-8-10	地表下0.15mで地山面を検出。	34°38'11"	135°31'22"
118	難波大道路	N95-12	1995	立会調査 東住吉区山崎3-10-6	地表下0.1mで地山面を検出。	34°37'17"	135°31'22"
119	難波大道路	N95-13	1995	立会調査 東住吉区山崎3-13-12	地表下0.65mで地山面を検出。	34°37'38"	135°31'23"
120	難波大道路	N95-14	1995	立会調査 東住吉区山崎3-7-16	地表下0.4mで地山面を検出。土層は中程度の遺物を含む層。	34°37'44"	135°31'21"
121	難波大道路	N95-16	1995	立会調査 阿倍野区文の丘4-21-12	地表下0.83mで地山面を検出。土層は互層を含む中程度の遺物を含む層。	34°37'58"	135°31'20"
122	難波大道路	N95-19	1995	立会調査 阿倍野区文の丘4-12-2	地表下0.45mで地山面を検出。	34°38'3"	135°31'21"
123	難波大道路	N95-20	1995	立会調査 阿倍野区天王寺町南2-4-2	地表下1.1mで地山面を検出。土層は互層を含む中程度の遺物を含む層。	34°36'50"	135°31'24"
124	難波大道路	N95-21	1995	立会調査 阿倍野区文の丘4-5-11	地表下0.75mで地山面を検出。土層は中程度の遺物を含む層。	34°38'4"	135°31'21"
125	難波大道路	N95-22	1995	立会調査 阿倍野区文の丘4-13-17	地表下0.75mで地山面を検出。土層は中程度の遺物を含む層。	34°38'1"	135°31'17"
126	難波大道路	N95-23	1995	立会調査 阿倍野区文の丘4-10-7	地表下0.65mで地山面を検出。	34°38'20"	135°31'20"
127	難波大道路	N95-24	1995	立会調査 東住吉区山崎3-4-3-31	地表下0.5mで地山面を検出。土層で砂層(時局不明)を確認。	34°37'6"	135°31'23"
128	難波大道路	N96-01	1996	立会調査 東住吉区山崎3-2-14-17	地表下0.4mで地山面を検出。	34°38'62"	135°31'21"
129	難波大道路	N96-02	1996	立会調査 東住吉区山崎3-1-2-24	地表下0.5mで地山面を検出。	34°37'21"	135°31'22"

表3 離波大道路で行われた既往の調査(3)

番号	遺跡名	調査年度	調査機関	調査地	調査内容	調査結果(調査年度)	
130	離波大道路	N299-04	1996	立会調査	東谷区立南東岡田4-3-25	地表下0.8mで離波面を抽出。	34°35'53" 135°31'22"
131	離波大道路	N299-05	1996	立会調査	阿部野区立岡田1-6-11	地表下1.1mまで掘削。すべて近現代の盛土。	34°36'30" 135°31'20"
132	離波大道路	N299-06	1996	立会調査	阿部野区立今町南2-16-14	地表下1.1mまで掘削。近世以降の作土層。	34°36'36" 135°31'21"
133	離波大道路	N299-07	1996	立会調査	東谷区立岡田4-6-18	地表下1.0mで掘削。0.2m以下は水成堆積層。	34°36'59" 135°31'21"
134	離波大道路	N299-08	1996	立会調査	阿部野区立今町南2-12-21	地表下1.1mまで掘削。0.7m以下は水成堆積層。	34°36'54" 135°31'23"
135	離波大道路	N299-09	1996	立会調査	東谷区立岡田21-10-2	地表下0.3mで離波面を抽出。	34°37'17" 135°31'21"
136	離波大道路	N299-10	1996	立会調査	東谷区立岡田1-18-30	地表下0.38-0.72mで離波面を抽出。	34°37'35" 135°31'22"
137	離波大道路	N299-11	1996	立会調査	東谷区立岡田1-13-6	地表下1mで離波面。幅1mの東西方向の溝を抽出。	34°37'38" 135°31'23"
138	離波大道路	N299-12	1996	立会調査	東谷区立岡田3-26-11	地表下0.5mで離波面。直下で土層の遺構を抽出。盛土の上層部、断面が片方出土。	34°37'24" 135°31'24"
139	離波大道路	N299-13	1996	立会調査	阿部野区立岡田4-7-15	地表下0.3mで離波面を抽出。	34°36'55" 135°31'23"
140	離波大道路	N299-14	1996	立会調査	阿部野区立岡田3-16-3	地表下1.2mまで掘削。1m以下は水成堆積層。	34°36'56" 135°31'22"
141	離波大道路	N299-17	1996	立会調査	阿部野区立今町南2-22-8	地表下1.35mで離波面。時間不整の溝を抽出。数十センチの溝が出土。	34°36'53" 135°31'22"
142	離波大道路	N299-18	1996	立会調査	東谷区立岡田1-10-22	地表下1.25mで離波面を抽出。	34°37'43" 135°31'20"
143	離波大道路	N299-19	1996	立会調査	阿部野区立岡田1-9-6	地表下0.7mで離波面を抽出。	34°36'18" 135°31'23"
144	離波大道路	N299-20	1996	立会調査	東谷区立岡田23-11-12	地表下0.8mで離波面を抽出。	34°37'12" 135°31'23"
145	離波大道路	N299-21	1996	立会調査	阿部野区立岡田3-6-19	地表下0.55mで離波面を抽出。	34°36'13" 135°31'23"
146	離波大道路	N299-22	1996	立会調査	東谷区立岡田22-14-17	地表下0.4mで離波面を抽出。	34°37'0" 135°31'20"
147	離波大道路	N299-23	1996	立会調査	東谷区立岡田南東岡田4-3-18	地表下1.1mまで掘削。すべて近代の盛土。	34°35'52" 135°31'23"
148	離波大道路	N299-24	1996	立会調査	阿部野区立岡田1-7-18	地表下0.6-0.7mで離波面を抽出。	34°36'21" 135°31'23"
149	離波大道路	N299-25	1996	立会調査	阿部野区立今町南2-6-2	地表下0.95mで離波面。土層が、土壌を抽出。	34°37'08" 135°31'23"
150	離波大道路	N299-26	1996	立会調査	東谷区立岡田4-2-6	地表下0.3-0.5mで離波面。土層は中世の作土層が出土。	34°37'0" 135°31'20"
151	離波大道路	N299-27	1996	立会調査	阿部野区立岡田1-2-6	地表下0.15mで離波面を抽出。	34°36'28" 135°31'22"
152	離波大道路	N299-28	1996	立会調査	東谷区立岡田21-5-24	地表下0.8mで離波面。0.45-0.6mの灰色粘土質シルト層が古墳時代の土層群に出土。	34°37'20" 135°31'24"
153	離波大道路	N299-31	1997	立会調査	東谷区立岡田1-8-16	地表下0.47mで離波面を抽出。	34°37'43" 135°31'25"
154	離波大道路	N299-32	1997	立会調査	東谷区立岡田25-11-13	地表下0.3-0.35mで離波面を抽出。	34°37'34" 135°31'23"
155	離波大道路	N299-33	1997	立会調査	東谷区立岡田南東岡田13-1-17	地表下1mで離波面を抽出。	34°36'26" 135°31'23"
156	離波大道路	N299-35	1997	立会調査	東谷区立岡田南東岡田2-5-4	地表下0.63mで離波面を抽出。	34°36'12" 135°31'22"
157	離波大道路	N299-37	1997	立会調査	阿部野区立岡田1-8-4	地表下0.7mで離波面を抽出。	34°36'20" 135°31'23"
158	離波大道路	N299-38	1997	立会調査	東谷区立岡田南東岡田13-3-6	地表下1.1mまで掘削。すべて近代の盛土。	34°36'54" 135°31'23"
159	離波大道路	N299-39	1997	立会調査	阿部野区立岡田1-3-6	地表下0.3-0.5mで離波面を抽出。	34°36'45" 135°31'23"
160	離波大道路	N299-40	1997	立会調査	東谷区立岡田23-12-17	地表下0.65mで離波面。0.35-0.65mの灰色粘土質シルト層の作土層。	34°37'10" 135°31'21"
161	離波大道路	N299-41	1997	立会調査	東谷区立岡田23-3-15	地表下0.5mで離波面を抽出。	34°37'47" 135°31'23"
162	離波大道路	N299-42	1997	立会調査	東谷区立岡田23-12-13	地表下0.55mで離波面。0.45-0.55mで水成堆積層。その上層は土層。	34°37'21" 135°31'23"
163	離波大道路	N299-43	1997	立会調査	東谷区立岡田21-2-21	地表下0.35mで離波面を抽出。	34°37'21" 135°31'23"
164	離波大道路	N299-44	1997	立会調査	阿部野区立岡田3-17-12	地表下0.5mで離波面を抽出。	34°36'56" 135°31'23"
165	離波大道路	N299-45	1997	立会調査	東谷区立岡田2-8-8	地表下0.4mで離波面を抽出。	34°37'29" 135°31'20"
166	離波大道路	N299-46	1997	立会調査	東谷区立岡田南東岡田4-3-11	地表下1.2mまで掘削。すべて近代の盛土。	34°35'53" 135°31'24"
167	離波大道路	N299-47	1997	立会調査	阿部野区立岡田1-6-27	地表下0.4mで離波面を抽出。	34°36'14" 135°31'21"
168	離波大道路	N299-48	1997	立会調査	阿部野区立岡田2-22-12	地表下1.4mまで掘削。すべて近代の盛土。	34°36'30" 135°31'23"
169	離波大道路	N299-49	1998	立会調査	東谷区立岡田22-2-3	地表下1.9mまで掘削。すべて近代の盛土。	34°37'18" 135°31'18"
170	離波大道路	N299-50	1998	立会調査	阿部野区立岡田2-2-22	地表下0.48mで離波面を抽出。	34°37'21" 135°31'23"
171	離波大道路	N299-53	1998	立会調査	阿部野区立岡田2-7-14	地表下0.43mで離波面を抽出。	34°37'28" 135°31'20"
172	離波大道路	N299-54	1998	立会調査	東谷区立岡田南東岡田2-3-4	地表下0.75mで離波面を抽出。	34°36'12" 135°31'22"
173	離波大道路	N299-55	1998	立会調査	東谷区立岡田21-7-22	地表下0.15mで離波面を抽出。	34°37'18" 135°31'24"
174	離波大道路	N299-56	1998	立会調査	東谷区立岡田25-1-17	地表下0.5mで離波面を抽出。	34°37'55" 135°31'22"
175	離波大道路	N299-58	1998	立会調査	東谷区立岡田23-13-3	地表下1.1mで離波面を抽出。0.3-0.35mまで作土層。	34°37'11" 135°31'23"
176	離波大道路	N299-60	1998	立会調査	東谷区立岡田22-16-14	2mを掘削。地表下0.4-0.45mで離波面。土層を抽出(土層が片方出土)。	34°37'26" 135°31'20"
177	離波大道路	N299-61	1998	立会調査	阿部野区立岡田23-4-5	2mを掘削。地表下0.2-0.3mで離波面。方形の柱穴(古代?)を抽出。	34°36'11" 135°31'23"
178	離波大道路	N299-63	1998	立会調査	東谷区立岡田23-4-17	地表下0.32mで離波面を抽出。	34°37'32" 135°31'26"
179	離波大道路	N299-65	1998	立会調査	東谷区立岡田22-14-12	地表下0.4mで離波面を抽出。	34°37'6" 135°31'21"
180	離波大道路	N299-67	1998	立会調査	阿部野区立岡田1-8-4	地表下0.7mで離波面を抽出。	34°36'20" 135°31'23"
181	離波大道路	N299-68	1998	立会調査	阿部野区立岡田1-18-20	地表下0.8mで離波面を抽出。	34°37'59" 135°31'21"
182	離波大道路	N299-69	1998	立会調査	東谷区立岡田南東岡田(市立自然史博物館)	地表下1mで離波面を抽出。	34°36'37" 135°31'21"
183	離波大道路	N299-70	1998	立会調査	東谷区立岡田南東岡田13-20	地表下0.7mで離波面を抽出。0.62mで土層群を含む遺構を抽出。	34°37'38" 135°31'22"
184	離波大道路	N299-71	1998	立会調査	東谷区立岡田南東岡田(市立自然史博物館)	地表下1.1mで離波面を抽出。	34°36'37" 135°31'21"
185	離波大道路	N299-72	1998	立会調査	阿部野区立岡田南東岡田1-8-3	地表下0.62mで離波面。0.44-0.62mで灰土層(古土?)の作土層。	34°36'26" 135°31'22"
186	離波大道路	N299-73	1998	立会調査	東谷区立岡田南東岡田(市立自然史博物館)	地表下0.5mで離波面を抽出。	34°37'39" 135°31'21"
187	離波大道路	N299-74	1998	立会調査	東谷区立岡田南東岡田(市立自然史博物館)	地表下0.2-0.25mで離波面を抽出。	34°36'52" 135°31'13"
188	離波大道路	N299-75	1998	立会調査	東谷区立岡田南東岡田1-10-1	地表下0.65mで離波面を抽出。	34°37'42" 135°31'22"
189	離波大道路	N299-81	1999	立会調査	東谷区立岡田南東岡田4-3-18	地表下0.85mで離波面。0.5-0.7mの灰色粘土質シルト層が古墳時代の土層群に出土。	34°35'52" 135°31'23"
190	離波大道路	N299-83	1999	立会調査	東谷区立岡田南東岡田2-4-26	地表下0.85mで離波面。0.5-0.7mの灰色粘土質シルト層が古墳時代の土層群に出土。	34°36'13" 135°31'22"
191	離波大道路	N299-85	1999	立会調査	阿部野区立岡田南東岡田2-12-20	地表下1.05mで掘削。すべて近代の盛土。	34°36'34" 135°31'23"

表4 難波人追跡で行われた既往の調査(4)

番号	通称名	調査年度	年代	調査地	調査内容	調査結果		
192	難波大道路	N099-06	1999	立会調査	阿部野区文の3-14-18	地表下0.45mまで掘削。すべて現代地層。	34°38'27"	135°31'21"
193	難波大道路	N099-07	1999	立会調査	東住吉区公園南4-6-12	地表下1.4mで粘土層を検出。その上層は現代地層。	34°35'50"	135°31'20"
194	難波大道路	N099-08	1999	立会調査	阿部野区文の3-3-12	地表下0.25mで粘土層を検出。	34°38'16"	135°31'23"
195	難波大道路	N099-09	1999	立会調査	阿部野区文の3-3-13	地表下0.65mで粘土層を検出。	34°38'11"	135°31'23"
196	難波大道路	N099-10	1999	立会調査	東住吉区公園南4-2-1-3	地表下0.5mまで掘削。すべて現代地層。	34°36'19"	135°31'23"
197	難波大道路	N099-12	1999	立会調査	東住吉区公園南4-2	地表下1mで粘土層を検出。0.5-1mは近世以降の土層。	34°37'48"	135°31'23"
198	難波大道路	N099-13	1999	立会調査	阿部野区文の3-3-8-12	地表下0.15mで粘土層を検出。0.5-1mは近世以降の土層。	34°38'11"	135°31'23"
199	難波大道路	N099-14	1999	立会調査	東住吉区公園南4-1-5	地表下1mまで掘削。すべて現代地層。	34°37'23"	135°31'24"
200	難波大道路	N099-15	1999	立会調査	東住吉区公園南4-1-5-28	地表下0.5mで粘土層を検出。	34°37'20"	135°31'25"
201	難波大道路	N099-16	1999	立会調査	東住吉区公園南4-1-5	地表下0.25mで粘土層を検出。	34°37'20"	135°31'25"
202	難波大道路	N099-18	1999	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	4mまで掘削。地表下0.5-0.7mで粘土層を検出。	34°37'34"	135°31'20"
203	難波大道路	N099-21	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.75mで粘土層を検出。0.35-0.75mは近世以降の土層。	34°38'17"	135°31'23"
204	難波大道路	N099-22	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.5mまで掘削。すべて現代地層の土層。	34°36'06"	135°31'22"
205	難波大道路	N099-23	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.75mで粘土層を検出。	34°36'59"	135°31'19"
206	難波大道路	N099-24	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.38mで粘土層を検出。	34°37'20"	135°31'20"
207	難波大道路	N099-25	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.95mまで掘削。すべて現代地層。	34°38'07"	135°31'23"
208	難波大道路	N099-26	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.47mで粘土層を検出。	34°37'27"	135°31'21"
209	難波大道路	N099-27	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.9-1.25mまで掘削。すべて現代地層。	34°36'19"	135°31'23"
210	難波大道路	N099-28	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.8mまで掘削。すべて現代地層。	34°38'26"	135°31'20"
211	難波大道路	N099-29	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.75mで掘削。すべて現代地層。	34°37'18"	135°31'24"
212	難波大道路	N099-30	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.25mで粘土層を検出。	34°38'17"	135°31'23"
213	難波大道路	N099-31	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.8mで粘土層を検出。	34°38'06"	135°31'23"
214	難波大道路	N099-32	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.5mまで掘削。すべて現代地層の土層。	34°35'51"	135°31'22"
215	難波大道路	N099-33	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.4mで粘土層を検出。	34°36'18"	135°31'23"
216	難波大道路	N099-34	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下1.25mで粘土層を検出。0.7mで中世の遺構。粘土の南北方向の中心を検出。	34°35'51"	135°31'22"
217	難波大道路	N099-35	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.3mまで掘削。表1上は黄褐色の粘土層。表2上は黄褐色の粘土層。表3上は黄褐色の粘土層。	34°38'18"	135°31'20"
218	難波大道路	N099-36	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.35mで粘土層を検出。	34°37'12"	135°31'19"
219	難波大道路	N099-37	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.5mまで掘削。すべて近代以降の土層。	34°38'06"	135°31'21"
220	難波大道路	N099-38	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.65mで粘土層を検出。	34°37'57"	135°31'21"
221	難波大道路	N099-39	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.7mまで掘削。0.25-0.7mは粘土層。	34°37'18"	135°31'23"
222	難波大道路	N099-40	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下1mまで掘削。0.75-1.1mは近世以降の土層。	34°38'05"	135°31'24"
223	難波大道路	N099-41	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.85mで粘土層を検出。0.75-0.85mの黄褐色の粘土層。その上層は現代地層。	34°38'33"	135°31'24"
224	難波大道路	N099-42	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.5mまで掘削。すべて近代以降の土層。	34°38'27"	135°31'21"
225	難波大道路	N099-43	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.8mで粘土層を検出。	34°38'25"	135°31'21"
226	難波大道路	N099-44	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.8mで粘土層を検出。その上層は近代以降の土層。	34°38'06"	135°31'22"
227	難波大道路	N099-45	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.5mで粘土層を検出。	34°38'18"	135°31'21"
228	難波大道路	N099-46	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.8mで粘土層を検出。上層は現代地層。	34°36'44"	135°31'28"
229	難波大道路	N099-47	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下1.32mで粘土層を検出。	34°36'34"	135°31'28"
230	難波大道路	N099-48	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下1.1mで粘土層を検出。0.3-0.8mは粘土層。その上層は近代以降の土層。	34°38'06"	135°31'22"
231	難波大道路	N099-49	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下1.32mで粘土層を検出。南北方向の中心を検出。	34°37'47"	135°31'21"
232	難波大道路	N099-50	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下1.65mで粘土層を検出。1.65mで中世の遺構を検出。	34°37'47"	135°31'21"
233	難波大道路	N099-51	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.3mで粘土層を検出。	34°38'14"	135°31'23"
234	難波大道路	N099-52	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下3mまで掘削。0.18mで粘土層。2mで近代以降の土層を検出。	34°37'40"	135°31'24"
235	難波大道路	N099-53	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下1mまで掘削。すべて現代地層。	34°38'31"	135°31'23"
236	難波大道路	N099-54	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.8mまで掘削。0.25mの粘土層を検出。	34°38'31"	135°31'23"
237	難波大道路	N099-55	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下1.5mまで掘削。1.1mで水層を検出。	34°38'14"	135°31'23"
238	難波大道路	N099-56	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.6mで掘削。すべて現代地層の土層。	34°37'28"	135°31'20"
239	難波大道路	N099-57	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.55mで粘土層を検出。0.45-0.55mの粘土層。粘土層の中心を検出。	34°37'58"	135°31'20"
240	難波大道路	N099-58	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.3mで粘土層を検出。	34°37'37"	135°31'20"
241	難波大道路	N099-59	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.8mで粘土層を検出。	34°38'12"	135°31'23"
242	難波大道路	N099-60	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下1.15mで粘土層を検出。	34°37'58"	135°31'22"
243	難波大道路	N099-61	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.95mまで掘削。表上と粘土層。	34°38'27"	135°31'22"
244	難波大道路	N099-62	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下0.2mで粘土層を検出。	34°38'12"	135°31'23"
245	難波大道路	N099-63	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下1.1mまで掘削。すべて現代地層。	34°38'31"	135°31'24"
246	難波大道路	N099-64	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.65mで粘土層を検出。	34°37'37"	135°31'20"
247	難波大道路	N099-65	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.8mで粘土層を検出。0.38mで近代以降の土層。	34°38'17"	135°31'21"
248	難波大道路	N099-66	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下1mまで掘削。0.55mで近代の土層を検出。	34°37'58"	135°31'20"
249	難波大道路	N099-67	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下1.5mで掘削。1.4mで古代以降の土層を検出。	34°37'58"	135°31'22"
250	難波大道路	N099-68	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.95mで掘削。表上と粘土層。	34°37'27"	135°31'21"
251	難波大道路	N099-69	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.95mで掘削。表上と粘土層。	34°37'27"	135°31'21"
252	難波大道路	N099-70	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.95mで掘削。表上と粘土層。	34°37'27"	135°31'21"
253	難波大道路	N099-71	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下1mまで掘削。すべて近代以降の土層。	34°37'40"	135°31'20"
254	難波大道路	N099-72	2000	立会調査	阿部野区文の3-11-6	地表下1.8mまで掘削。1.7-1.8mの粘土層を検出。	34°38'24"	135°31'21"
255	難波大道路	N099-73	2000	立会調査	東住吉区公園南4-1-2-9	地表下0.25-0.57mで粘土層を検出。	34°36'55"	135°31'25"

第V章 まとめ

今回の調査は、試掘調査時で検出された古代とみられる土壌SK301について、遺構としての掘がりとその時期を特定することを目的としたが、同時期と考えられる遺構は、埋土が共通するピットや土壌が調査区北西側でわずかに検出されたのみで、遺物も出土しなかった。したがって、これらの遺構は周辺の発掘調査成果を踏まえ、埋土の特徴から古墳時代から古代にかけての遺構と判断した。また、調査区東半部は難波大道の推定地に接しているが、これに関係する道路や溝などの遺構も認めることができなかった。

1970年の岸俊男氏や足利健亮氏の指摘[岸1970・足利1970]以来、難波宮跡の調査研究の進展とともに、古代の基幹道路とされた難波大道の位置づけも都城研究の中で大きなウエイトを占めることになった。

難波大道に関わる最大の成果は、1980年に大阪府松原市の大和川今池遺跡において発見された幅18mの南北道路跡である。この道路の側溝から7世紀末～8世紀初頭の須恵器が出土したことから、前期難波宮の段階に難波大道が存在していた可能性が高くなった。

一方、大阪市内においても難波大道跡に係わる立会調査や発掘調査がこれまでに300件近く実施されてきた。しかしながら、大和川今池遺跡で見つかったような道路や側溝と考えられる確かな遺構はいまだ検出されていない。

難波大道に係わる古代史、歴史地理的な研究はすでに一定の成果を上げており、今後は考古学分野からの検証や修正が必要とされている。難波大道の直接的な証拠となる遺構は大阪市内では未発見であるが、逆に、現状で難波大道の存在を否定する資料が揃っているわけでもない。難波宮の中軸線が、四天王寺東側で方格地割として残っていること、摂津国と河内国の国境となっていること、摂津国住吉郡の条里地割施行に反映されていることなどを考慮すれば、肯定的な材料は多い。いずれにせよ、今後の調査の進展に期待するところが大きい。

今回の調査で最も遺存状況が良好であったのは中世の遺構群である。遺構埋土から13世紀後半の瓦器碗細片が、遺構群を覆う、遺構埋土とよく似た地層から瓦質土器細片がそれぞれ出土したことから、これらの遺構群の時期は中世末と考えられる。発見された遺構には、溝・鋤溝・土壌・小穴がある。特に、鋤溝を調査区の広い範囲で認めることができた。

そのうち溝SD201は、南東-北西方向から南西方向へ直角に曲がるもので、導水路というより土地を区画するためのものであったとみられる。屋敷地に伴う溝の可能性もあるが、建物跡とみられる遺構は検出できなかった。また、鋤溝群のように耕作に係わる遺構が多く見つかったことから、調査区やその周辺は、この時期にはおもに耕作地として利用されていたものとみられる。溝や鋤溝群は南東-北西と、直交する南西-北東の2方向が認められた。鋤溝は調査区の中央を通るSD201・202を境

に東西で方向を違えている。この地割は上町台地の脊梁方向や周辺の谷地形などが反映されたものと考えられる。調査地は難波大道に接する位置であるが、正方位を示す地割の痕跡を認めることはできなかった。したがって、上町台地の西縁部に当る調査地付近では、大阪市南部地域で広く見られるような正方位の条里地割が及んでいなかった可能性が高く、難波大道の存在を仮定した場合でも、道路は中世までには廃絶していたものと思われる。

近世になっても、調査地は引続き耕作地として利用されていたようである。周辺では農業用の貯水を目的とした大小の溜池が多数掘られるが、調査区でも溜池の一部とみられるSX120や野井戸SE112などを検出した。調査区のすぐ南側でも明治時代まで溜池が残っていた。これらはもともと窪地や谷地形となっているところを堰き止めてつくられる場合が多く、SX120も地形を利用した小規模な溜池であったと思われる。

近代以降は、調査地周辺は大きく様変わりする。近代都市大阪の発展とともに近郊であった当地は急速に宅地化が進み、土地区画整理などによってそれまでの地形は改変され、平坦になり、町名変更等によりその土地に残されていた歴史的情報も失われた。

今回の発掘調査によって、都市化により現状ではうかがうことのできなくなった当地の歴史的変遷を明らかにすることができた。周辺の調査例が増加することによって、さらなる情報が加わることを期待したい。

(紺川)

引用・参考文献

- 足利健亮1970、「恭仁京の京極および和泉・近江の古道に関する若干の覚え書き」：『社会科学論集』創刊号 大阪府立大学、pp.33-60
- 1978、「和泉国」：藤岡謙二郎編『日本古代の交通路』I 大明堂、pp.76-83
- 1991、「難波京をめぐる古代要路網」：上田正昭編『古代の日本と東アジア』小学館、pp.72-92
- 1997、「景観から歴史を読むー地図を解く楽しみー」：『NHK人間大学』7月～9月期
- 後川忠太郎2000、「難波大道基礎分析」：大阪府文化財調査研究センター編『大和川今池遺跡(その1・その2)』、pp.321-326
- 阿倍野区1956、『阿倍野区史』
- 福澤近太郎1881、『大阪地籍地図』吉江集書堂
- 上田宏藏1988、「生野・田辺古墳群」：『新修大阪市史』第1巻 新修大阪市史編纂委員会、pp.388-395
- 内田九州男1989、「豊臣秀吉の大坂建設」：佐久間貴上編『よみがえる中世2 本願寺から天下へ』、pp.34-35
- 近江俊秀2006、「古代国家と道路」青木書店
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 1995、『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 1996、『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 2003、『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 大阪市土木技術協会・大阪都市協会1985、『大阪市の旧街道と坂道』
- 大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』
- 1999a、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告ー1996年度ー』
- 1999b、『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』
- 2001、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告ー1998年度ー』
- 2002、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告ー1999年度ー』
- 2006a、『株式会社奥村組による建設工事に伴う難波大道発掘調査(ND06-1次)報告書』(内部資料)
- 2006b、『阿倍野筋4丁目における建設工事に伴う阿倍野筋遺跡発掘調査報告書(AS06-1)報告書』(内部資料)
- 大阪府教育委員会1988a、『大和川今池遺跡発掘調査概要』IV
- 1988b、『大和川今池遺跡発掘調査概要』V
- 1995、『大和川今池遺跡発掘調査概要』XII
- 大阪府文化財センター2003、『大和川今池遺跡(その5・その6・その7)』(財)大阪府文化財センター調査報告書第90集
- 大阪府文化財調査研究センター2000、『大和川今池遺跡(その1・その2)』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第53集
- 川西宏幸1978、『円筒埴輪総論』：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95-164(〔川西1988〕に再録)
- 1988、『古墳時代政治史序説』塙書房

- 岸俊男1970、「難波一大和古道略考」：『小栗田淳教授退官記念国史論集』小栗田淳教授退官記念事業会、pp.81-92
- 1977、「難波宮の系譜」：『京都大学文学部紀要』17 京都大学文学部
- 喜田貞吉1979、「難波京」：『喜田貞吉著作集』第5巻 平凡社、pp.59-74
- 木原克司1984、「上町台地の微地形と難波宮下層遺跡掘立柱建物」：『難波宮址の研究』第八 大阪市文化財協会、pp.194-207
- 金田章裕1988、「長尾街道・竹内街道の調査と条里プラン」：大阪府教育委員会編『長尾街道・竹内街道』歴史の道調査報告書第3集、pp.41-54
- 黒田慶一1986、「長原(城山)遺跡出土の『冨官家』墨書土器」：『ヒストリア』第111号 大阪歴史学会、pp.1-23
- 日下雅義1980、『歴史時代の地形環境』古今書院
- 小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 土色帖』日本色研究事業株式会社
- 佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：『難波宮址の研究』第十二 大阪市文化財協会、pp.253-265
- 沢村仁1970、「難波京について」：『難波宮址の研究』研究予察報告第六 難波宮址顕彰会、pp.1-12
- 滋賀県埋蔵文化財センター2006、「古代『田原道』発見!? 大津市関津遺跡」：『滋賀県埋文ニュース』第318号
- 清水靖夫編1995、『明治前期・昭和前期大阪都市地図』柏書房
- 積山洋1996、「東住吉区で見つかった古墳時代の集落跡」：『葦火』第62号 大阪市文化財協会、p.8
- 1997、「難波京の方角地割りをさぐる」：『郵政考古紀要』通巻33号 大阪・郵政考古学会、pp.19-38
- 竹山真次1935、『難波古道の研究』湯川弘文社
- 田中清美1995、「桑津弥生集落の姿遷」：『葦火』第56号 大阪市文化財協会、pp.2-3
- 棚橋利光1995、「中世四天王寺周辺の村と庄一金堂含利講記録から」：『大阪の歴史』45 大阪市史編纂所、pp.1-29
- 趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ 大阪市文化財協会、pp.41-44
- 寺井誠1999、「管状土鍾からみた操業形態の復元」：『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』大阪市文化財協会、pp.32-34
- 2002、「前期難波宮成立前後の清水谷地域」：『大板城跡』Ⅴ 大阪市文化財協会、pp.51-56
- 2003、「前期難波宮南方の土器群と開発」：『大阪歴史博物館研究紀要』第2号 大阪市文化財協会、pp.83-88
- 2004、「難波宮成立期における土地開発」：『難波宮址の研究』第十二 大阪市文化財協会、pp.161-170
- 常盤会1927、『住吉村誌』
- 難波洋三1992、「徳川氏人坂城期の培路」：『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会 pp.373-400
- 服部昌之1988、「古代における景観構成とその変化」：『新修大阪市史』第1巻 新修大阪市史編纂委員会、pp.43-89
- 東成郡役所1922、『東成郡誌』
- 森村健一1981、「『難波大道』の復元」：『大和川・今池遺跡』大和川・今池遺跡調査会
- 1994、「堺市発掘の難波大道と竹ノ内街道」：『季刊考古学』第46号 雄山閣出版、pp.49-51
- 1995、「大阪・堺市長曾根遺跡の復元『竹内街道』」：『古代交通研究』第4号 古代交通研究会、pp.49-56
- 大和川・今池遺跡調査会1981、『大和川・今池遺跡』Ⅲ
- 山本加三1926、「北田辺の一庵寺址について」：『考古学雑誌』第16巻第4号 考古学会、pp.238-243

あ　と　が　き

「難波大道」が今回の調査地付近を通過すると推定するのは、北端部に道路の基点となる難波宮が存在していなければならず、『日本書紀』編纂期に持たれていた記憶から遡及したものであることはいうまでもない。

今回、難波大道の痕跡を求めて発掘調査を行い、さらに、調査地周辺に残る道路痕跡や字切図等を用いて考察を行ったが、古代の人工的な直線道路である難波大道の痕跡はつかめず、上町台地の地形に左右された中世以降の開発による地割が確認された。このことは、『日本書紀』の記憶や、その南端部の大和川今池遺跡で発見されている推定難波大道の道路痕跡などから、古代宮都の難波京からの道路が存在していた可能性を否定するものではない。ただ、その道路が中世の開発によって失われてしまったか、あるいは上町台地の地形に左右され、直線ではなかった可能性もあり、今後の発掘調査の成果に委ねることになった。

発掘調査は地域に埋もれた遺産を実証的に解明する方法の一つであり、期待通りの成果を産み出さないこともある。今回もそうした事例の一つなのであろう。しかし、誤った歴史観を修正し、より合理的な歴史観を育むための手法といえよう。

こうした成果を積み重ねて、新しい豊かな歴史像を構築していくことが我々の責務と確信する。

(松尾 信裕)

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈地名・遺跡名など〉

- | | | |
|---|-----------|-----------------------|
| カ | 瓦質土器 | 18, 47 |
| | 関西系陶器 | 28 |
| サ | 堺指鉢 | 24, 29 |
| シ | 糸里 | 9, 33, 40, 42, 47, 48 |
| セ | 瀬戸美濃焼 | 29 |
| ソ | 備前 | 1, 10~12, 35, 47 |
| | 軟質施釉陶器 | 29 |
| ヒ | 肥前(陶)(磁)器 | 24, 28, 29 |

- | | | |
|---|---------------|---|
| あ | 阿倍寺跡 | 5, 6 |
| | 阿倍野筋南遺跡 | 3, 5, 6 |
| う | 上町台地 | 3, 5, 13, 17, 40, 42, 48 |
| お | 大津道(長尾街道) | 1, 3, 7, 31~33, 35, 40 |
| か | 勝山遺跡 | 3, 7 |
| き | 紀州街道 | 6 |
| く | 杭全遺跡 | 6 |
| | 熊野街道 | 6, 42 |
| | 桑津遺跡 | 3, 5, 6 |
| し | 四天王寺 | 1, 6, 32, 35, 40, 42, 47 |
| | 磯崎津路 | 31, 40 |
| た | 田辺廃寺 | 5 |
| な | 長尾街道 | 1, 3, 7, 31, 33, 35, 40 |
| | 難波京朱雀大路 | 1, 3, 7 |
| | 難波大道 | 1~3, 5, 7, 9~12, 31,
33~35, 40, 42, 47, 48 |
| | 難波宮(の中軸(延長)線) | 1, 31~33, 35, 40, 47 |
| は | 法楽寺 | 6, 9, 12, 33 |
| も | 桃ヶ池遺跡 | 3, 6, 7 |
| や | 山坂遺跡 | 5, 9 |
| | 山坂神社 | 9, 33 |
| | 大和川今池遺跡 | 1, 10~12, 33, 35, 47 |

**Archaeological Report
of
the Naniwa-Daido Site in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Abeno Welfare Institution (tentative name)

March 2007

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole or small pit

SX : Other features

CONTENTS

Foreword	
Explanatory Notes	
Chapter I Background and Progress of the Excavation	1
Chapter II Historical Background of the Site	3
S.1 The site location and historical background	3
S.2 Present situation of archaeological research at the site	7
1) Introduction	7
2) Results of archaeological investigations in Osaka City area	7
3) Results of archaeological investigations at the Yamatogawa Imaike site	10
4) Conclusion	12
Chapter III Results of the investigation	13
S.1 Stratigraphy	13
S.2 Features of before the Ancient Period	15
1) Outline of features	15
2) Features	17
S.3 Features and remains of the Medieval Period	18
1) Outline of features	18
2) Features and remains	18
S.4 Features and remains of the Edo Period	24
1) Outline of features	24
2) Features	24
3) Remains	28
Chapter IV Examinations on the Naniwa Daido Ancient Royal Road	31
S.1 Present situation and problem of research at the site	31
1) Introduction	31
2) Present situation of research at the site	31
3) Problem of archaeological research	33
S.2 Historical change of geographical environment of around the site	35
Chapter V Conclusions	47
References and Bibliography	49
Postscript and Index	
English Contents	
Reference Card	

報告書抄録

ふりがな	なにわだいどうあととくつちょうさほうこく							
書名	難波大道跡発掘調査報告							
副題	(仮称)阿倍野学園建設工事に伴う発掘調査報告書							
編著者名	絹川一徳・寺井誠・松尾信裕							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法門坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なにわだいどうあと 難波大道跡	なにわだいどうあと 大阪市阿倍野区 美章園3丁目28	27119	—	34° 38′ 15″	135° 31′ 20″	20060628 ～ 20060804	660㎡	大阪市健康福祉局 による(仮称)阿倍 野学園建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
難波大道跡	田畠 その他	古墳～平安時代 室町時代 江戸時代		土壌・柱穴・小穴 溝・土壌・小穴 鍵溝 井戸・溜池・溝 土壌・小穴・鍵溝		土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器 土師器・瓦・近世陶磁器・泥面子		
要約	2006年に大阪市阿倍野区美章園3丁目で行った難波大道跡の発掘調査結果を報告する。古代以前、中世、近世の3時期の遺構と遺物を確認した。 おもな遺構は中世のもので、溝、土塀、鍵溝群などからなる。南東-北西方向の溝は2条認められ、うち1つは調査地内で南西方向へ直角に曲がる。区画のための溝とみられる。鍵溝群はこれらの溝によって方向が規制されており、南東-北西方向と南西-北東方向のものに分かれる。 また、近世の遺構として江戸時代後期の野井戸や溜池などが検出された。 さらに難波大道跡をめぐる周辺の発掘調査を集成し、従来の調査・研究成果を整理した。							

図 版



調査区北半部の遺構検出状況(東から)



調査区北半部の遺構完掘状況(東から)

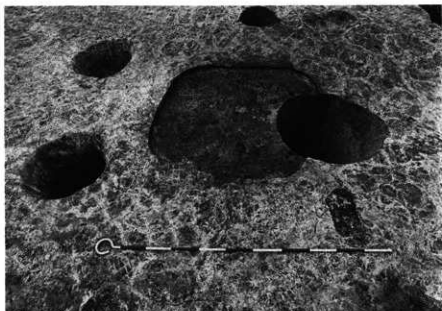


調査区南半部の遺構検出状況
(東から)



調査区南半部の遺構定界状況
(東から)

調査区北半部
SK301検出状況
(西から)



調査区北半部
SK301断面
(南から)



調査区北半部
SK301完掘状況
(南から)





調査区北半部
SD201検出状況
(南西から)



調査区北半部
SD201完掘状況
(南西から)



調査区南半部
SD201・202検出状況
(南東から)

調査区南西部
溝群完掘状況
(西から)



調査区南半部
SD201・202断面
(南から)



調査区北半部
SX210断面
(東から)





調査区北半部
SX120
(南西から)



調査区北半部
SX120
(西から)



調査区北半部
SK107
(南西から)

調査区北半部
SD101・102完掘状況
(北東から)



調査区北半部
SD103～105完掘状況
(北東から)



調査区北半部
東壁中央断面
(西から)





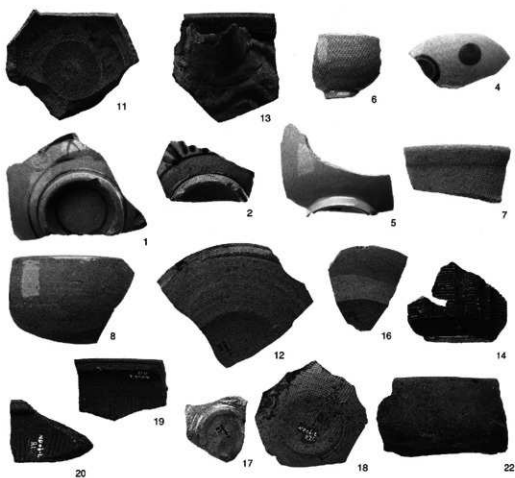
調査区北半部東壁断面
(西から)



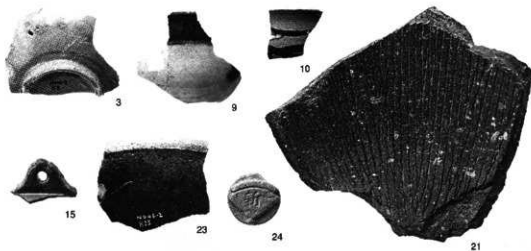
調査区南半部東壁断面
北側(南西から)



調査区南半部東壁断面
南側(南西から)



SX120(1・2・4・8・11~14・16~20・22)



SK109(9・15・24)、SE112(3・21)、SE113(10)、SD104(23)

大阪市阿倍野区 難波人遺跡発掘調査報告

ISBN978-4 86305-000-6

2007年3月31日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法門坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0041 大阪市中央区北浜 2-1-14

**Archaeological Report
of
the Naniwa-Daido Site in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Abeno Welfare Institution (tentative name)

March 2007

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of
the Naniwa-Daido Site in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Abeno Welfare Institution (tentative name)

March 2007

Osaka City Cultural Properties Association